

188.8
Mu59

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4

始



~~525-423~~

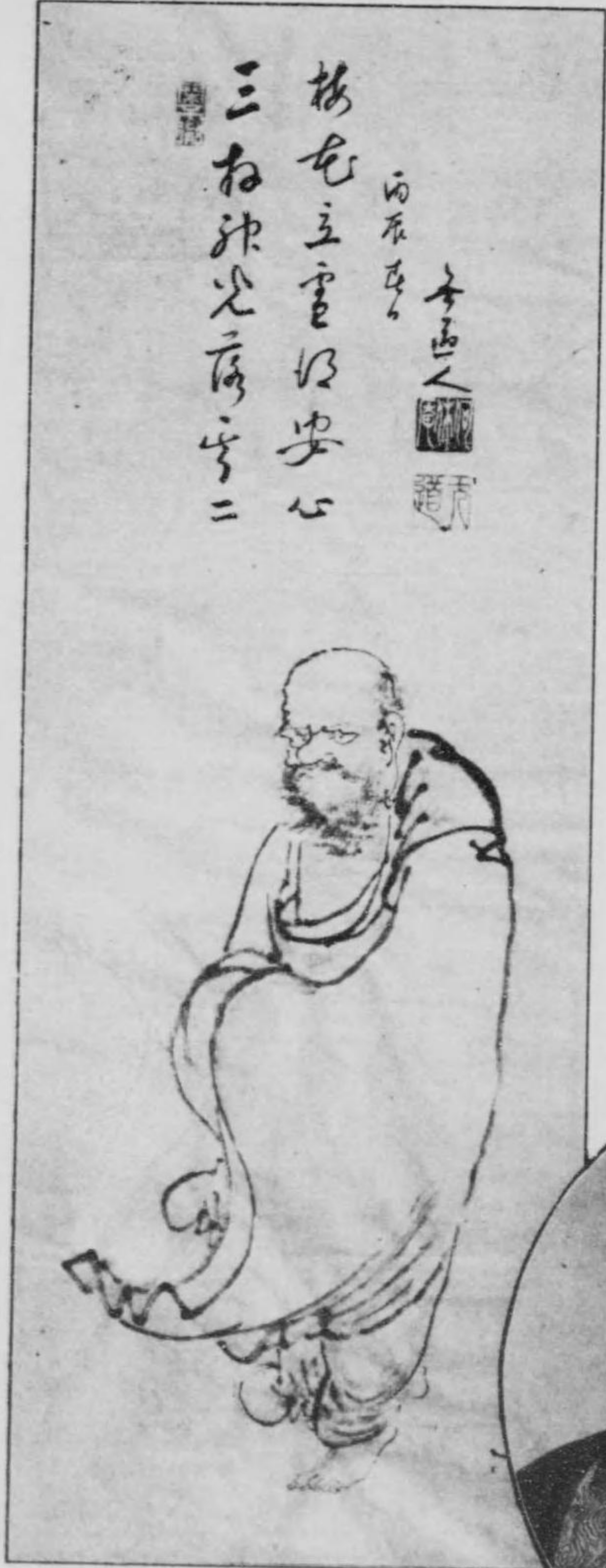
21-80
之



182.8
Mu 59

禪
實
話

大正
5. 7. 6
内交



著者と其筆蹟



はしがき

一、本書は大正貳年一月より、同四年十二月迄、即ち滿三ヶ年に亘りて雑誌「日本及日本人」に登載したるものを、今回東亞堂主人の需めによりて、一本に纏め發刊したるものなり。

一、全體を前中後の三篇に分ちたるは、別に意味あるに非ず、坐禪論と雲水物語とは、互に似通へるを以て、之を前篇に收め、高僧逸話の長篇のみを中篇に集め、後篇は専ら禪林佳話を蒐録したり、故に配列の順序は雑誌に掲載したる順序にあらざるや勿論なり。

一、此書題して「參禪實話」といふ、是れ予が雲水時代より今日に

はしがき

至る十數年間の實地見聞と、坊間に傳へらるゝ古今高僧の行履とを提掇して閑葛藤を打したるものにして、其意専ら婦女童蒙をして一讀以て禪の妙趣を會せしめん婆心に外ならざれども、亦一には布教講演の話材に資せんとして特に意を注ぎたる點もあり。

一、本書の挿畫は禪畫に獨得の妙を得たる佐藤禪忠師の揮毫せるものにして、本書を編輯するに際し、師は特に揮毫の快諾を與へられたり、故に茲に感謝の意を表す。

洛西花園客舎に於て

何休菴主人識

大正五年六月

參禪實話目次

前編

坐禪論

- (一) 坐禪の作法 一
- 坐禪……大燈國師の歌……坐禪儀……身の坐禪……結跏趺坐……數息觀……利劍
- (二) 數息觀 五
- 無念無想……大死底の人……心珠……羽化登仙
- (三) 坐禪に足を組む理由 七
- 第一の理由……第二の理由
- (四) 定力と見識 九
- 第三の理由……定力……二力平均……雲居禪師……雲居と狼……入定狀態……白隱禪師

目次

(五) 頭と腹

腹の修業……腹の力……腹の人……夜船閑話……呼吸……眞人の息……自心は息……息は自心……長息は長壽……臍下丹田……交は生の象……心火……散步……大西郷……天地一枚……虚心坦懐

(六) 參考

安樂の法門……養生の道……默の一字……歴々聲あり……唯心所現……無臭の液體……希有の香氣

雲水物語

はしがき

禪の鼻祖……禪と日本文明……美術史……雲水

禪僧と禪機

禪寺の小僧……龍蛇混雜……心眼……匡道和尚……臘坊主奴

庭詰

道場……師家……庭詰……掛鍋……僧堂と監獄

天龍寺の一夕

天龍僧堂……出て往け……當方は修行……門宿……感慨無量

且過詰

お客様……茶禮……座敷牢

禪堂修行は菩薩の修行

婆羅助……忍辱の業

參堂

叢林……師家に相見

僧堂の食物

大飯と居眠……僧堂生活……二粥一飯……天井粥……千古の格言

禪僧と大食

雲水の元氣……默雷和尚……坐禪と大食

目次

目次

雲水の威儀……………五二

食事…蘇東坡

實行主義の教育……………五三

行解相應…實地の修行

陰徳主義の教育……………五三

陰徳家…米一粒…貴き心掛

古徳の潜行密用……………五五

薬山和尙…無相大師…大参客…易地皆然…十四流…無著和尙…峨山禪師

僧堂内の徳義……………六〇

玄秀老師…護法心…隱元…僧堂家…掃除

逸話三則……………六三

活教育…修行者の心得…頑さん…典座の寮頭…仙崖和尙…早く寝よ…學校と僧堂

禪堂の日用規定……………六六

日用規定

禪とは何ぞ……………七七

禪は不可説……………七七

玄妙不思議…知音同士…不可説…翫味すべし…禪書…禪の妙處…宇宙哲學…似而非居士…慶僧侶

公案の説明……………八二

公案…階子禪…鍋蓋禪…豁然大悟…一重關

公案の内容……………八五

無字…隻手音聲…柏樹子…大哲理

教外別傳不立文字……………八六

教外別傳…以心傳心…看板

殺人劍活人刀……………八七

目次

目次

活人刀……阿彌陀佛……活佛

一遍上人——淨業者……………九三

念起即覺……印可……念佛の行者……彌陀と同年……因地一聲

直指人心見性成佛……………九五

本來の面目……無位の真人

見性とは何ぞ……………九七

見性……活用問題……一つ貝……お天狗……妙機妙用

大疑の下に大悟あり……………一〇〇

大接心……臘八……無一物……絶體絶命

禪は宗教か……………一〇三

禪定は儀式に非ず……お悟り……絶對的

悟後の修行……………一〇六

悟後の修行……隨所爲主……大洪水……快川國師……一轉語……大燈國師……無相大師

禪の效用……………一一〇

隻手の聲……平生の知見……禪は諸道の根本……諸道の達人

禪と武士道……………一一四

一 緒言……………一二四

武士道……儒教

二 禪と武士……………一二五

北條時宗……………一二六

佛光禪師……請帖……時宗の修禪……逸話

足利尊氏——楠正成……………一二九

楠正成……明極禪師……正成の參禪……師登禪師……楠寺

織田信長……………一三三

澤彦和尙……僧策彦……南化國師……安土山記

秀吉——家康……………一三三

耳塚……兌長老……僧崇傳

目次

目次

家光——宗矩……………二二四

澤菴和尚……………二二四

大石良雄……………二二五

盤珪國師……良雄の仇討……祭文……手製の達磨……硯の銘……疑團氷解……………二二五

三 帝王と禪僧……………二二九

龜山天皇……大明國師……南院國師……吾子々孫々……往年の宸翰……花園法皇……大
休和尚……御幸の間……後陽成天皇……南化禪師……閑文字に非ず……………二二九

禪と茶事……………二三六

榮西禪師の茶子將來……………二三六

佛教の恩惠……傳教大師……明惠上人……傳來者は榮西也……………二三六

上古は茶を藥用に供す……………二三八

和漢茶誌……自然生の茶……茶の十徳……養生の仙藥……空也上人……………二三八

上古の茶事……………二四一

永忠僧正……我朝曾喫茶……………二四一

山城宇治の茶……………二四三

岩上茶園……宇治の茶……將來の動機……………二四三

茶式と夢窓國師……………二四五

百丈清規……村田珠光……禪門諸祖の力……………二四五

四疊半茶室の起源……………二四六

方丈……眞の茶室……………二四六

歸 結……………二四八

一遍の心香……………二四八

妙心寺の算盤面……………二五〇

京都の七本山……………二五〇

聲明面……伽藍面……自慢面の話……雪江和尚……………二五〇

雪江和尚と寺院經濟……………二五三

大坂陣……會計法……隆盛の原因……………二五三

目次

目次

活禪活地の應用……………一五四

・榮西、聖一……夢窓……峻嚴なる祖風……實際禪……献身の再興

古人の道念……………一五七

・特洲和尚……開山同様の事跡……四神足……蓮如上人

東山時代の文化……………一五八

・宗教界の英傑

歸結……………一五九

・二原因……隻手の影

中編

匡道禪師逸話……………一六一

禪師幼時の貧狀……………一六一

・禪師の父……月窓和尚……幕引……師弟背中合せ

禪師の初行脚……………一六三

・惠潭……師匠の誰何……脱走

侍者中の苦心……………一六五

・棟林和尚……一日に廿里……一大難事

本師危篤の特報……………一六七

・本師の危篤……ヤレ殘念

二代目の貧乏和尚……………一六九

・恩師の一喝

這の狸坊主……………一六九

・勘當解除……千葉居士……一喝……安心……記念の囊……滿腔の無念

通參實に十五年……………一七三

・師の發憤……守本尊

百年の修行尙不可及……………一七五

目次

目次

海山和尚……破盆

居士の懺悔談

白髮の一老人……居士の自白……守護の神

工事實に十四年

井戸掘

入室は後任に聽て呉れ

看門の潭ッ

無言誠に功あり

管長時代……朗讀の請求

黒衣の使者

(一) 緒言

大日本歴史……歴史上の誤謬……抹殺……曲筆……根本材料

(二) 長州征伐の原因

原因……長州追討……尾侯の意見……巷間の俗説

(三) 東福寺海州和尚の推薦

海州和尚……問罪使……正使……副使

(四) 正副兩使の大覺悟

大覺悟……上陸を許さず……栗原純平……急遽歸城……活手腕

(五) 吉川監物氏との會見(一)

登城……發砲事件……三暴臣……毛利父子……朝敵の惡名……謹慎中……籠城の體……感激數刻

(六) 吉川監物氏との會見(二)

三臣の首級……武門の仁術……日本僧侶……優待

(七) 翌日の會見

山田右門……第二回の會見……歎願書……武門の耻辱……目賀田喜助、大草周吉……吉川監物氏

目次

目次

(八) 鼎州師と藩士の問答 110

問答……武の字……僧家の一言……退城……兩師の辭退

(九) 大坂本陣へ出頭 117

兩船競争……田宮如雲……千賀與八郎……衆生濟度……歎願書……御發陣……鼎州師の
見幕……國家の大慶……絶後再生の恩……大團圓

(十) 三暴臣の斬首 121

三太夫の處刑……首賞檢……割腹

(十一) 鼎州和尚の審問 125

審問……一佳話……拙僧は日本僧侶……衆生濟度

(十二) 雜事 127

十人扶持……墓地龍泉菴にあり……鼎州師の性質……逸話……機外師の生國

(十三) 結論 131

應接振り……禪修養の賜物……御贈位

善徳寺祐天和尙 133

燒寺を希望す 133

善徳寺……本望成就

遠大の計畫 134

恰好の龜鑑……深計遠謀

托鉢の目的 136

唯一の目的……注意周到

夜業に繩綯ひ 137

夜業……精力主義

下準備廿五年 138

大八車……大道演說……出稼人

縮衣の工學博士 140

圖面引き……赤手空拳

逸話二則……………三三

肥擔桶に衝突……………葬式の導師……………法義が許さぬ……………高價な葬式

後篇

禪林佳話……………三三五

はしがき……………三三五

活經典……………活法門……………行履即ち法門……………行藏一ならず

聖福寺仙崖和尚……………三三七

貧乏神……………家の寶

仙崖和尚詩人を回ます……………三三八

鐘鼓の音

澤菴和尚の辭世……………三三九

夢の一字

澤菴和尚と柳生宗矩……………三四〇

一枚の板……………不思議の働き

雲居禪師の道力……………三四一

悪少年……………佇立不動

雲居草賊を度す……………三四三

草鞋錢……………首を斬れ……………賊の懺悔……………空也上人……………紫電一閃

雲居禪師偈……………三四六

貪癡痴の三毒

馬祖の百丈……………三四七

身體に火を放けられたら何うなさる？……………三四八

大典和尚……………身體の放火

鳥窠と白樂天の問答……………三四〇

目次

三歳の童子……八十の老翁

古梁和尚と魚肉……………二五〇

魚肉

天桂禪師、寒山拾得の賛……………二五一

大灯國師の足の引導……………二五三

引導……辭世

佛印禪師と蘇東坡の商量……………二五三

學界の大儒……禪界の巨擘……商量

乃公の口からは佛を出した……………二五四

越溪和尚と三條實美公……………二五五

胡座の儘

毒湛禪師と某紳士……………二五六

紳士……趙州の無字

無より有を生ずる實例……………二五六

父子三人の乞食……一休と蟻川……本來空の妙味……一茶

虛無僧……………二六〇

虛竹禪師……極意……天地獨歩の境涯……微妙の笛聲……法律上の不諭罪

朝寢坊の寄附……………二六三

朝寢三十分の寄附……面白い話……夫婦喧嘩の寄附

一休和尚逸話……………二六五

一休の眞骨頂……禪機……祕密中の祕密……華叟の引導……一休の引導……追出せく

篩は無用なり……………二七一

雷雪潭……何者の無禮漢ぞ

海舟翁の座右銘……………二七二

座右銘

妙心寺愚堂和尚……………二七三

目次

目次

遠念の偶頌……自信ある愚堂……活法戦
 峨山禪師某名士に教ふ……………二七五
 紳士の煩悶……生死岸頭……大死一番底
 世人は多く幽霊……………二七六
 依草附木の精靈
 仁者の心動く……………二七七
 曹溪大師
 鐵眼禪師逸話……………二七八
 禪師の父……妻禪師を慕ふ……大坂の洪水……宇治の飢饉……尺牘……一人の武士……
 追跡……藏經の價額……千代女の句
 不老不死の大和尚……………二八三
 大圭和尚……黒衣……棚から牡丹餅……一大梵鐘……吊鐘大和尚……無言の大説法……興
 禪寺の鐘

和尚裸體で策作る……………二八八

透權和尚……俗語

山寺の無欲な和尚……………二八九

御苦勞千萬……江山風月……和尚の境涯

緇衣の佐倉宗五郎……………二九一

惠瓊長老……一傑僧……打坐三晝夜……願意貫徹……偉人の薰化

王法不思議佛子と對座す……………二九五

用があるなら此方へお出で……………二九五

南天棒

愛犬の位牌……………二九六

默雷和尚

默雷和尚の爛眼……………二九七

默雷、居士の心中を看破す

目次

山岡鐵舟の敏捷……………二五八

兵卒山岡を狙撃す

放屁一發の御詫び……………二五九

焼いたお芋

それでは天下が取れぬ……………三〇〇

獨園と桐野

鎌倉の洪川和尚……………三〇一

洪川和尚……浩然の氣……禪師の出家……離縁狀……鬼大揃……忽然大悟……投機の偏

以前は酒屋の丁稚……………三〇四

十六歳で番頭……出家の動機……在家と出家……行脚遊方

最初の發心と最後の道心……………三〇七

徳と修行……修行の得力……無頓着……最初の發心……最後の道心

死すとも再び此の門に入らず……………三二〇

廳然出奔……儀山和尚……餅屋は餅……呑湖閣……便所の草履

我這裡無生死……………三二四

馬鹿坊主

それ見よ生きて居る……………三二五

一人の雲水……隻手の聲はどうした

白隱の死とは何ぞ……………三二六

死の一字

閻魔の首を引ぬけ……………三二八

蜀山人の狂歌……此端通るべからず……首を引ぬけ

禾山青巒を一喝す……………三三〇

青巒居士……下がれ

納は恥かしいわい……………三三三

目次

道生會の世話人

百丈禪師

鋤耒を隠匿す……大覺悟大勇猛心

心の光り

麻谷和尚……風性……心の光り

結構な二本の腕

地球上の玉……一是一非……二本の手……金の采配も握るが尻をも拭く

道縦和尚の孝心

祖芳和尚……一生黒衣……内外玲瓏

八幡の伽山和尚

某華族の葬式……馬鹿坊主め

僧侶には菩提心

解脱上人……菩提心なき智者高僧……明恵上人の慈訓……能僧も徒事あり

古人刻苦の状況

全身皆蚊孺子……七夜不臥……老鼠に三拜す……悟後の活工夫……捨てし心

空手にして取れ

花園法皇……眞桑瓜……空手にして出せ

梅林寺羅山和尚

義玄院……用不着

風の蓄

風の蓄

一杯飲んで行くから待て

落武者……殺すなら殺せ

信長公と貧乏和尚

布令……貧乏和尚……一日違ふ……御褒美……古歌

不足なは主人ばかり

目次

目次

禪榻茶話……御主人ばかり
 佛教と耶蘇教との相撲……………三四九
 鐵舟居士……相撲……本來空
 佛法と世話……………三五〇
 平常心是道……佛法と世話
 正見と邪見……………三五二
 淺間しい了簡……蠅的結婚
 宗教心が無かつたら泥棒だ……………三五三
 宗教心
 位人心を極めたら注意しろ……………三五三
 アー面白くない……得庵廿年の修禪
 豊太閤の活作略……………三五四
 一佳話……當意即妙

白い紙を黒くするのだ……………三五六
 無功德
 乞食何人ぞ我れ何人ぞ……………三五七
 乞食何人ぞ……神在ます
 糞もふけば金の采配も握る……………三五八
 拙者の手
 翠丸は男子の徽章なり……………三五九
 片倉小十郎……宇宙の大靈……順逆
 無相大師……………三六〇
 形ちの坐禪
 利休の死人坐禪……………三六一
 廣月と利休……一聲爆然……生々活々の禪
 雨漏りに箆籬……………三六三

目次

目次

大師當時の妙心寺……悟道の妙味

雲居の機智……………三六四

帆掛け船……兩眼を閉じた小僧

盤珪禪師賊僧を憫む……………三六五

賊僧……一人の雲水……禪師の赤誠

西郷南洲の禪機……………三六七

あゝ有難う

仙崖和尚の奇行……………三六八

大垣藩の政治……國外放逐

米香煎か麥香煎か……………三七〇

洪川和尚……禪門の活作略

以身說法……………三七二

斷食接心……立石の番頭……五日飯

柳生但馬入禪の動機……………三七三

極意に流派なし……心法……澤菴和尚

澤菴和尚の劍法……………三七五

老鼠……技術……氣合……俺れは猫だ……南柯一場の夢……大策は無策

一休草賊を度す……………三七八

一休早速承諾

禪學は瓢箪のやうぢや……………三七九

瓢箪の風景

白隠和尚の事ども……………三八〇

眼中三世の諸佛なし……槐安國語……這の大惡僧……ウン諾し……兩親は吃驚仰天
……倒退三千……隻手音聲……白隠の妙藥……眼病の妙藥……眼病の禁物……好文字

目次

禪 坐



目

次

終

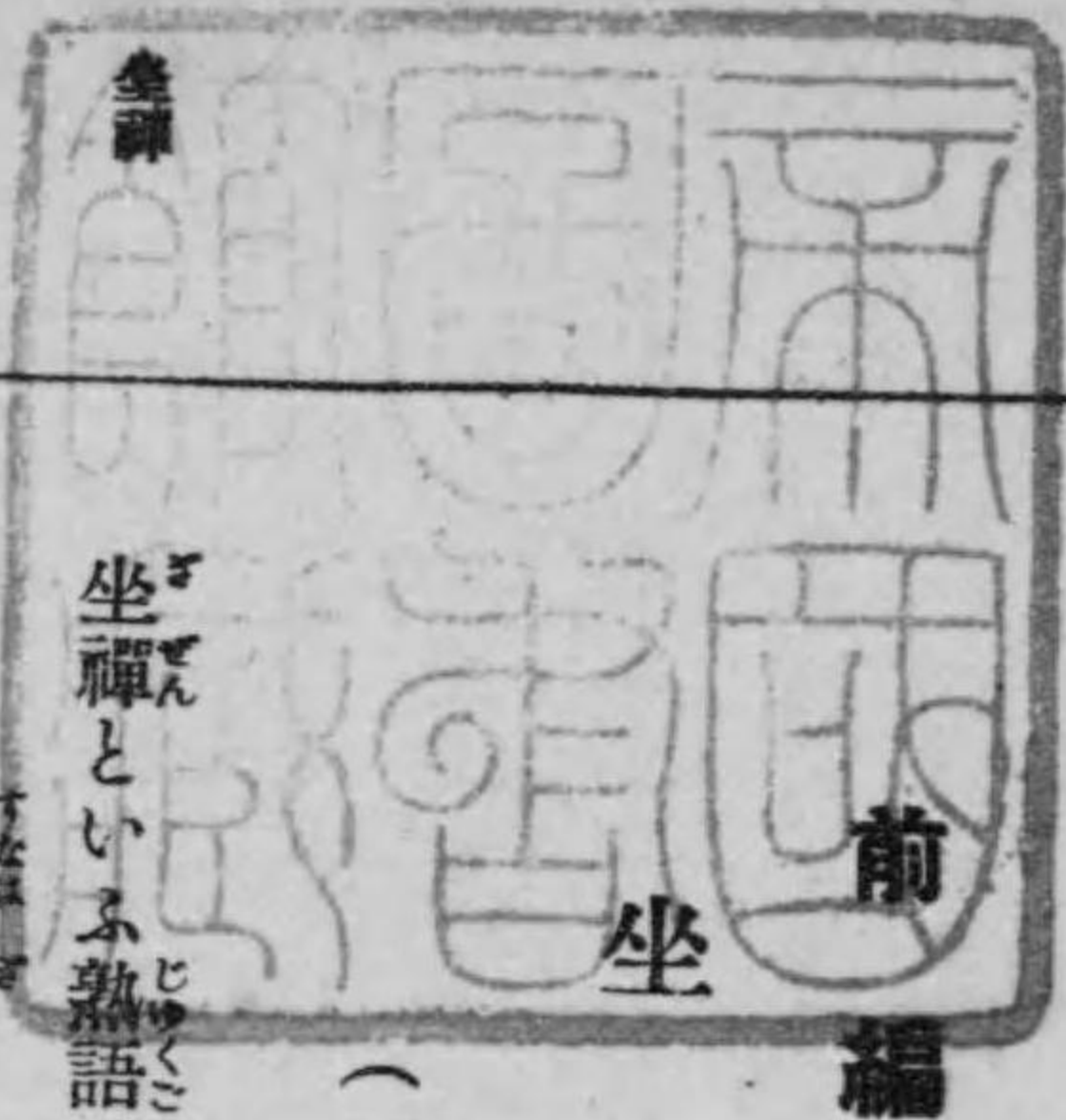
目

次



參禪實話

何休庵主人著



坐禪論

(一) 坐禪の作法

坐禪といふ熟語の起りは、梵漢兼擧というて、梵語と漢語とを併せ用ゐたものである、即ち坐とは漢語にして禪とは「チャーナ」と云ふ梵語の音を其儘に移したもので、詳には禪那と云ふ可きである。支那にはこれを靜慮と譯してある、

坐禪の作法

又六祖壇經には「外一切善惡の境に於て心念起らざるを名けて坐と云ひ、内自性を見て動せざるを禪と爲す」とも云うてある。シテ見ると、坐禪と云ふ二字には坐と禪との二つの意義があるやうにも取られ、今その孰れが可なるやを知らざれども、兎も角禪は先づ坐して工夫する必要がある。

然らば坐禪は徹頭徹尾坐しなければならぬかと云ふに必ずしも然うではない。

大燈國師は「坐禪せば四條五條の橋の上、往來の人を深山木にして」とも申され、又古語に「動中の工夫は靜中の工夫に優ること百千萬倍」ともあり、或は又「行も亦禪、坐も亦禪、語黙動靜、體安然」ともあるからには、必ずしも坐する必要はないのである。が併しそれは既に充分到り得た人に就て云ふ事であつて、未だ到り得ない者は、然うは可かない、吾々が一つの文章を綴るにしても、平素熟練を積んで置けば、人々の雜沓する騒がしい場所でも、一氣呵成することも出来るが、慣れない初心者であると、可成物靜かな部屋に這入つて、机に向はなければ、

筆が執れないと云ふやうに、禪も亦これを工夫するには自ら其場所を得、その方法を得なければならぬ。坐禪儀には此の事が詳しく説いてある。

坐禪儀の文は何人の作である歟、今之れを知るに由なけれども、孰れは古の大徳の作に相違ない、熟讀すればする程、その用意の周到なることが知れる。兎も角、坐禪には心の坐禪と身の坐禪との二つがあるけれども、心の坐禪の事は姑く措くとして身の坐禪に就て、今坐禪儀の文に依りて、坐禪の方法を説く。

先づ第一坐禪するに必要な事項は、精神をして爽快ならしむる事である。精神を爽快にする爲には、飲食の如きも可成多からず少からず食し、睡眠も亦適度にして、充分身體の調節を計つて置く、而して愈々坐する時は、厚く坐物を敷き、寛く衣帯を繫け」とあるから、著物の如きも窮屈に著けず、ゆつたりと著込み、坐蒲團は可成厚く敷き、又その坐蒲團は單に平たく布かず、臀部の當る所を少しく高くするを可とす、ナゼなれば其處を高くすれば、脊梁骨が自然と豎起され、

結跏趺坐

身を支ふるに甚だ樂であるからである。坐は結跏趺坐、半跏趺坐、孰れを探るも隨意である。結跏趺坐とは兩足を組む事で、半跏趺坐とは左の足を以て右の腔の上に安することである。それから坐を組んで仕舞つたならば、今度は右の手を左の足の上に仰向けにして置き、左の掌を以て右の掌の上に安じて、兩手の拇指の面と面とを相拄ふる、斯くして坐も組み兩手も亦相拄へたならば、次には「浮屠の如く」とあるから、其状恰も五重の塔の如く、脊梁骨を豎起して、頭と脊髓とは一直線となり、耳と肩とは相對し、鼻と臍とも相應じ、舌は上の腭を拄へ、唇齒は相著け、眼は微かに開いて昏睡を招がぬやうにする、而して最後に下腹即ち臍下丹田にウンと力を入れるのである、併し初からは爾う注文通りにゆくものでない、否、ゆかない事はないが、折角拈弄した公案を何時の間にか取逃がして仕舞つて、潮の如く湧き來る煩惱妄想の魔軍の爲に、滅茶々にされて仕舞ふから、乃で禪の初歩には數息觀といふ者を修めさせることもある。此處の處を坐禪儀には左の如く云うてある。

數息觀

禪儀には左の如く云うてある。

身相既定、氣息既調、然後寛ゴ放臍腹、一切善惡、都無ニ思量、念起即覺、覺レ之即失、久々忘レ縁、自成ニ一片、此坐禪之要術也

利劍

念起即覺覺之即失とは、若し煩惱妄想が起つて來たならば、公案の利劍を以て斷ち截り、斷ち截り斷ち截つて更に精彩を著くれば自ら打成一片の境界に至るとの意である。

(二) 數息觀

數息觀といふのは出る息入る息を數へて、以て入定する方法を云ふのである、此の數へ方は一より百に至りて復た一に返つても好し、或は一より千まで數へ、又一に戻つても好し、其處は人々の隨意であるが、兎に角出入の息を數へて無念無想無我の境涯に入る方法を云ふのである、禪では此の無念無想無我の境涯に入

無念無想

數息觀

るのが大切であつて、一たび此の境涯に入つて大死一番底の人となりその大死一番底の所より更に跳ね起きて復活した者でない、が吾々の精神といふものは、静めんと欲すれば、益々荒立つて来て容易に無念無想無我の境地に到れるものでない、白隠和尚が雲水時代に一夜坐禪して御座つたら、端なくも五年以前に、門前の婆さんへ、粉糠を五合貸して置いた事を思ひ出された、といふ話もある位で、吾々がチャント坐禪を組んで、公案を拈弄しようと思ふと、公案は何時の間にか遁げを打つて、胸の裡は丸で百鬼夜行の有様である、が、それでは心地を開発することが出来ない、珠を探るには宜しく浪を静む可し、定水清澄なれば心珠自ら現す」であるから、坐禪の身構へが出来たならば、次には氣息を調へ、氣息を調へて後ち公案の拈弄に取掛ると云ふ順序であるが、併し初心者は直ぐ坐禪して、直ぐ氣息の調ふものでない、乃で禪の初歩には數息觀を行らして、先づ氣息の調節を圖らしむるのである、けれども強ち爾うと定まつた譯で

なく、眞最初から、公案を授ける御師家さんも有るから、其處は一概に申されぬ。が、それは扱て措き、逃げよう／＼として居る公案を、逃がすまい／＼と引締めて、更に精彩を著くる時は、何時しか公案三昧に入つて、所謂無念無想無我の境涯に入ることを得る。此の境涯に入つた時の心理状態は羽化登仙と云はう歟、それこそ天地をも吞吐するの思ひがある。が併し此は一たびその實境に處した人で無いと分らぬ。

(三) 坐禪に足を組む理由

爰に一寸注意を仕て置かねばならぬ事は、坐禪に於ては足を組む、何故足を組む必要がある歟と云ふ事である。吾々人間が最も安定なる方法に於て、身構へをするにせよ、如何なる姿勢を採つたならば、最も安全で且つ最も強固であるかと云ふに只坐つた儘ではいかないし、胡座をかいては勿論宜ろしくない、然らば直

坐禪に足を組む理由

立したが好いかと云ふに、それは時間に於て許さぬ、時間が何時間経過しても、その久しきに堪へ、又山が崩れようが、海が割けようが、泰然自若として動かぬと云ふ姿勢は、坐禪を組む位、強固にして又安全なものはない。

坐禪の修行は曩にも既に論せし如く、命懸けの修行である、命懸けの修行をするには、充分の身構へを仕なければならぬ、これが抑も坐禪に足を組む一つの理由である。

第二の理由

次には坐禪に最も必要なる事項は、下腹即ち臍下丹田に力を入れる事である。何故臍下丹田の力が必要であるかと云ふに坐禪は公案を工夫する修行であつて、工夫と云ふ事は言葉を換へて云へば考へると云ふ事である、而して物を考へるに唯は考へられない、世間の人は考へると云ふ事に就て、一向無頓着で居られるが、仔細に調べて見ると、何事かを考へる時には身體の何處かに力を用ゐて居る。即ち手を組むとか、或は頭を下げるとか、但しは机に憑れるとか、又立つて居る時

であれば、知らぬ間に兩脚へ力が這入つて居るとか、寝て居る時であれば、眸子を据ゑて天井裏を凝視するとか、何とかして居る、此の頭を下げ、手を組み、机に憑れる、眸子を据ゑると云ふのは、何處かに力を入れて居る證據で、吾々が考へる時に、力を用ゐずして考へることは、決して出来ない、然れば公案を工夫するにも、全身中の何處かに力を用ゐなければならぬが、その力を下腹に蓄へて用ゐる位、又強固なものはない、是に於て乎、自然下腹に力を入れなければならぬが、それは單に坐つた儘や、胡座をかけた儘では、決して充分の力の這入るものでない、渾身の勢力を傾注して強大なる力を注ぎ入るには、何うしても足を組まなければならぬ。これが坐禪に足を組む第二の理由である。

(四) 定力と見識

下腹に力を入れるのは、考へるに就て身體の何處かに力を要するから、その爲

に入れるといふ許りでなく、其外に定力を得る爲に力を入れる必要もあるのである。下腹に力を入れて、造次にも顛沛にも、正念工夫を怠らなかつたならば、自然と定力が附いて来て、眞逆かと云ふ場合に非常の働きを爲す、元來定力と見識とは別なものであつて、一千七百則の公案が縦横無礙に捌きが付き、見識が一倍優れて居るからとて、それで其の人の定力が亦從つて優れて居るかと思ふに、必ずしも爾うでない、が併し禪の理想より云へば、見識も優れ、又定力も確つかりして、雙方共に圓滿でなければならぬのである。故に一方には公案の穿鑿を微細に遣つて、見識を高めると同時に、又定力をも確かり手に入れたらぬ、定力を確かり手に入れた人であると、咄嗟に起つた事件に對しても、決して驚くと云ふ事はない、例へば唐突に足下から犬が吠え附いたとする、さう云ふ場合には普通の者であると、面喰つて周章へて仕舞ふ、が、定力の据つた人であると、決して驚かぬ、ナゼかと云へば、定力のある人は、下腹即ち氣海丹田に一種の潛

勢力がある、その潛勢力が外物に對する抵抗力と成つて、何か事變の起つた場合、直に發動して受け答へて仕舞ふから、驚くと云ふ事はない、否或は驚くかも知れないが、よしや驚いたにしても、内にある力と、外から刺戟した力と、間髪を容れぬ間に、二力平均して仕舞ふから、驚きの様子が決して人の目に立たぬ、こゝが實に定力の定力たる所以で、定力のある人が非常の場合に際會して驚かなかつたと云ふ例は、古來幾らもある。左にその一二例を示す。

松島瑞岩寺の開山雲居禪師は、定力を練る爲に、毎夜々々、態ざと狼や狐狸の出さうな、墓場や森に往つて夜坐せられるのが日課であつた、所が土地の若者共は、禪師の毎夜の夜坐を見て、和尚果して幾何の力があるであらうか、一度驗して遣らうでないかと云ふので、或る夜禪師の歸途を要し、とある松の木に登つて待つて居た、それとは露知らぬ禪師は歩武肅々と歸つて來ると、若者は松樹の枝から猿臂を伸ばして何とも云はずに禪師の頭をムンズと擱んだ、勿論黒漫々た

る暗夜で而も時は丑三つ時である、然るに禪師一向驚きの様子もなく、攫まれた儘チツとして居られた、到頭根負けをして攫んだ手を放すと、禪師は歸つて仕舞はれた、四五日を経て若者が何に喰はぬ體を装ひ、兩三日以前の夜に何か異變に遭はれはしなかつたかと訊ねると、禪師は何物にも逢はなかつたが、併し誰か私の頭を攫んだ者があつた、けれども能く／＼考へて居たら、攫んで居た手が段々温く成つて來たから、コリヤ誰れかの惡戯であるわいと思つて歸つて仕舞つた、と云うて話されたと云ふ事である。

又禪師が墓場や森に往つて夜坐をして居られると、狼等が屢次出て來て禪師の鼻柱を時々齧いだと云ふ事である、その時と雖、禪師は神色自若、毫も動せられなかつたと云ふ事だ、此の話は大槻清崇さんの近古史談にも出て居るが、併し慙う云ふ話をする、世間の人はそんな馬鹿な事があるものか、それは禪宗坊主の作り話だと、一舉に否定して仕舞ふ人があるかも知れない、が、決して然うでな

い、眞の禪定に入つた人であると、此位の事は出来る。理學博士近重眞澄氏は其の名著「參禪錄」に於て、人の入定状態は動物に就て云へば、冬蟄状態、植物に就て云へば種子の状態であるといはれてあるが、如何にもその通りである。眞の禪定に入つた人であると二時間や三時間位は、息一つ仕ないのであるから、狼狽が之れに接近して、其何物たるかを感知せざる事は、或は無きにしても非ずである。又白隠和尚が兵庫の津から、駿河に向つて乗船せられた事があつた、所が途中大颶風に遭うて、船が今にも顛覆しさうに成つて、乗客は大に狼狽し出し、或者は神に祈り、佛に念じ、或者は起きつ轉ろびつして、大混亂を極めて居るに拘はらず、白隠和尚のみは、瞌睡三昧に入つて白河夜船の高齋であつたと云ふ話である。

以上は是れ雲居と云ひ、白隠と云ひ、皆な豪傑揃ひの話ばかりであるが、縱令雲居白隠の眞似事は出來ざるまでも、吾人に抵抗力となる一種の潛勢力、即ち定

力が多少にてもあつたならば、此の複雑なる人生に處する上に於て、尠なからぬ効果のある事は蓋し思ひ半に過ぐるであらう。

(五) 頭と腹

腹の修業

近頃の青年は考へると云へば、唯頭のみで考へると思つて居るやうであるが、考へるに頭に於てする位下手な事はない、頭に於てするを最も下策とし、次は胸に於てする事、最も上乘なるは腹に於てする事である、然るを世間の人は、考へると云へば、頭に於てする事だと思つて、無暗に頭を使ひ、遂ひにはそれが爲に、脳神経を痛めて青白く成つたり、又は神経衰弱を病むのであるが、憊ういふ人には「腹の修行」をさせ度いものである。

腹の力

に、ハヤ腹の大切なる事を言ひ現はして居る、如何にも頭が確かりした許りでは不可ぬ、頭が如何様に確かりしても、頭には力が無いが、腹が確かりすると、腹には力があるから、一朝逆境に處した場合にも、狼狽せぬと云ふ効果がある、昔の英雄豪傑が生死の巷に出入して、而も悠々自適毫も逼らなかつたと云ふのも、彼等皆な頭が確かりしてゐたのでなくして、腹が確かりして居たのである、近くは彼の大西郷と云ひ勝海舟と云ひ……此の二人者皆禪の修業あり……皆な是れ腹の人である、頭は智慧を入れる智慧袋ではあるが、併し元氣を養ひ力を蓄へる器ではない、であるから、吾人が此の複雑なる活社會に處して、萬變に應じて遂に窮せざる底のものは、頭でなくして、腹であるから、先づ夫れ腹の修行をする必要がある。

腹の人

腹の修行が出来てゐると、嘗に以上の効能があるのみならず、諸病も亦能く根治する事が出来る、此事に就ては、白隱の「夜船閑話」に委曲を盡して詳述して

頭と腹

坐禪論

あるから先づ一寸それを拜借して見よう。

今「夜船閑話」の主意を搔い摘まんで、お話をすれば大凡そ左の四項に歸するかと思ふ。

- 一、氣息を調整ならしむる事。
- 一、元氣をして臍下丹田に充實せしむる事。
- 一、心火をして下に向はしむる事。
- 一、常に虚心坦懐なる事。

尤も右の四項は必ず四種に區別すべきではない、何となれば力を下腹に入れて、漸次に氣息を調べてゆけば、全身の元氣は自ら充實する、充實すれば、心火は自ら下に向ひ、下に向へば精神は又自ら澄み切つて、即ち虚心坦懐なる事を得るのである、併し乍ら、今假に四項に分てば、説明する上に於て、常に説明の爲し易きのみならず、了解も亦出来易いと云ふ點からして、柄は斯く區別せしもの、畢竟

は同時に實行すべきものである。

第一 氣息を調整ならしむる事

人間の體の内、何が一番大切であるかと云ふに、呼吸即ち息位大切なものはない、吾人が活潑撥地に活動して居るのも、何が爲であるかと云へば、息があるからである、此の息が五分間止まれば、吾人の生命はないのである、然れば此れ位の大切なものはないが、偕てその息は單に呼吸さへ仕て居たならば、それで好いかと云ふに、決して然らず、白隠和尚曰く「真人の息は、是れを息するに踵を以てし、衆人の息は、是れを息するに胸を以てす」と如何にも面白いではないか、踵で息すると云ふと、何んだか可笑しく聞えるが、可笑しい所でない、實際踵で息をするやうにすると、否やが應でも、深い息長い息をせなければならぬ、深い長い息をすれば、自然正しい息をする、正しい息をすれば、従つて心も正しく成る、其の證據には、吾々に何にか氣に掛る事とか、又は不平な事でもあり、此

自心は息

息は自心

倏ち息使ひが不揃ひに成つて、何處ともなく落ち著かぬ風が見える、これが抑も息の心に關係の有る所以である、而已ならず、息と云ふ字を調べて見ると息と云ふ字は、自心と書く、然れば自心は息、息は自心と云ふ事に成つて、息が正しければ、心が正しくなり、息が不正であれば、心も亦不正と云ふ事に成る、故に息が正しくて心も亦正しければ、心身共に健かと云ふ事になり、息が不正で心も亦不正であれば精神としては煩惱妄想に囚はれ、肉體としては不健康と云ふ兆候を顯す、彼の腦病とか、神經衰弱とか、その他肺病胃病腹病ヒステリー等の患者は、概して此の浅い、短い、不正の息の者に多いやうである。

長息は長壽

加之、廣く世間の人に就て考へて見るに、浅い短い息をする人には短氣の人が多く、之れに反して、氣の悠長な人、即ち氣の長い人には、長い深い息をする人が多く、乃で亦言葉の上から調べて見ると、更に一層面白味を感じる、短氣は短息、長息は長壽である、故に浅い短い息をする人は、何うしても短

臍下丹田

命である、深い長い正しい息をする人は長命と云ふ事に成る、要之、不正な息をする人は思想も亂れ易く、正しい息をする人は、精神も正しく成り、短い息をする人は短命、長い息をする人は長壽と云ふ結論を得る事に成るから、これ位大切なものはない、白隠和尚が「真人は是れを息するに踵を以てし、衆人は是れを息するに胸を以てす」と言はれた、此の一語は短かけれども、味ひ長しである。

第二 元氣をして下腹に充實せしむる事

是れも甚だ大切である吾々五尺の體の内は何處が最も中央であるかと云へば、腹が一番中央である、故に此の中央に當る臍下丹田に全身の元氣を集めて、常に怠らず修養して居たならば、寒暑と雖も侵すことには、蜂蟻と雖も之を毒する事が出来ない、兎角人間が感冒に罹るとか、その他諸種の病氣に侵かされると云ふのは、身體中の何處かに、隙間があるからである、三百六十の骨節八萬四千の毛竅、皆な各々固めを堅くして内に守る處があつたならば、決して病の爲に附け

頭と腹

込まれると云ふ事はない、早い話が吾々が寒中雪隠に行く、雪隠に入つて五分十分寒風に洒らされても、滅多に風を引かない、又婦人が兩肌を脱いで、お化粧をする場合でも其の通り、普通であつたならば、風を引くべきであるのに、而も引かないと云ふのは、何ういふ譯かと云へば、御當人は無意識であつても、斯る場合には我れ知らず、全身に氣が入つて居るからである、是の如く、無意識の場合ですら既に風を引かぬと云ふ効能があるのに、況んや、平素心を用ゐて修養して居たならば、効果のない筈がない、殊に腹は全身の中央であるから、此處に氣が充ちて居たならば、従つて全身に元氣が旺盛して、平素の健康を助長することも多大である、第一腹をすかす事は妙である。

第三 心火をして下に向はしむる事

白隠和尚曰く「火の性は炎上なり、宜しくこれを下らしむ可し、水の性は下れるに就く、宜しくこれを上らしむ可し、水上り火下る、是れを名けて交と云ふ、

交は生の象

心火

散步

交るときは既済とす、交らざるときは未済とす、交は生の象、不交は死の象なり」と全く此の通りだ。世間の人が神経病を病むと云ふのは無暗に腦を使つて、心火を逆上せしむるからである、逆上する所の心火は可成的下に降らし、下に居る事を欲する憂鬱の氣は可成之れを上騰するやうにする。然うすれば一は上り一は下りて、爰に交合を爲し、交合に由つて生氣を發して來るから、自然と精神も爽かに成り又身體も健かに成るのである、之は吾人が日常の經驗に徴しても直に解る話である、例之ば腦に充血を感じて、頭が重く成つた時、試に散歩をして見るとする、すると何時の間にか、頭が軽快に成つて、氣がノンビリとして來る、之れは何ういふ譯かと云へば、散歩に依つて逆上してゐた心火が下に下つたからだ、或は又夜分寝られない時がある、此寝られない時には、何うしたならば宜かと云ふに、之は、色々の遣方がある、即ち坐禪の心得のある人であつたならば、直に起き直つて坐禪しても好し、又は寝た儘下腹に力を入れて、數十回深呼吸を行つても好し、且

頭 と 腹

つは又枕時計を足下の方に置いて、その鳴る音に注意を注いでも好し、何うしてゝも寝られる方法はある、が孰れも逆上せる心火を下に向はしむる原理を出でぬ。

第四 虚心坦懐なる事

是れが亦甚だ必要である、所が多くの人は、此の意味を取違へて虚心坦懐と云ふ事は、何も仕事を仕ないで、悠悠閑々と遊んで居る時、唯さう云ふ場合に於てのみ、出来る事であつて、雑務に鞅掌して居る時には出来ないことであらうと思ふ人があるかも知れないが、然う思つたら大なる誤まりである、如何なる活動の渦中にあつても、心は常に平々坦々であらねばならぬ、彼の大西郷が江戸城を受取りに往つた時、身は是れ單身敵中に在つて、いつ何時、九寸五分が閃めき、鐵砲丸が飛んで來ぬにも限らぬのに、それに彼れは城中に在つて、勝安房と談判の隙間隙間には、前日來の疲れで、グー／＼高駈を歩いて寝て居たと云ふ話で、勝安房が西郷を褒める時には、何時も蚊も此話を仕たと云ふ事である、斯る非常の場合に在

つて、何うしてそんな大膽な事が出来たかと云へば、彼れが眼中には敵もなく、九寸五分も無く、鐵砲丸も無く、江戸城もなく、只天地一枚の我れであつたからである、これが若心に掛る悪像空像があつたならば、決して夢にだも出来る事でない。

演説を聴く時に虚心坦懐であると、演説が能く聴かれる、仕事をする時に、虚心坦懐であると、仕事に専心になるから、仕事が出来、又虚心坦懐であれば、心を勞すると云ふ事が無い、心を勞しないから、従つて病むと云ふ事もない、昔から聖人に夢無しと云ふが、實際定力の据つて、定水の清澄なる人であると、夢を見ると云ふ事はない、夢を見ないのは平素坦懐で心を勞しないからである、心を勞しないと云へば、可成心を使はなかつたら好いかと云ふに、それは間違ひである、使つて使はず、勞して勞せない所が無ければならぬ。

之を要するに、以上の數箇條に注意して、可成頭を勞せず頭を勞する處を腹で勞し、語黙動靜、造次顛沛にも、常に心掛けて怠らなかつたならば……勿論之

れを爲すには禪の見性眼があれば、申分はないが、縱令見性眼がないにしても、時々勤め、刻々に修して居れば、白隠の所謂四百四病は悉く根治せざる迄も少くとも氣から出る病氣位ならば、之れを治する、必ずしも難からざる事であると思ふ、近頃東京で八笠しく云ふ、岡田虎次郎氏の「静坐呼吸法」とか、二木謙三氏の「腹式呼吸」とか云ふものも、夫れ々爲る仕方に於て、精粗巧拙の別はあれ、要は以上の原理に外ならぬであらうと信ずる。

(六) 参考

最後に衲は諸君の参考に供する爲、又は衲の説明の不足を補ふ爲に、左に坐禪儀や夜船閑話の重要な箇所を二三箇所抜萃して擧げて置くこととしよう。

一、竊に謂ふに坐禪は乃ち安樂の法門、而るに人多く疾を致すことは、蓋し用心を善くせざるが故也、若し善く此意を得れば、則ち自然に四大輕安、精神

爽利、正念分明にして法味神を資け、寂然として清樂ならむ、若し已に發明することあらば龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たりと謂ふ可し、若し未だ發明すること有らざる者も、亦乃ち風に因て火を吹き、力を用ゐること多からず、但肯心を辨せよ、必ず相賺らず。(坐禪儀、原漢文)

一、許俊が曰く、蓋し氣下焦に在るときは其息遠く、氣上焦に在るときは、其息促まる。

一、大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に溫暖ならん事を要せよ。

一、若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん、是れ眞觀清淨觀なり。

一、只要尋常言語を省略して、爾の元氣を長養せん事を、是の故に云ふ、目を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に黙す

默の一字

此の默すと云ふ一字に、萬斛の味ひがある、又左の如き一節があるから、少々長くはなるが、諸君の参考の爲に掲げて見る、最初に「幽が曰く」とある幽は、白幽子の事で、白隠和尚が内觀の法を授つた御師匠様である。

幽が曰く、行者（白隠）定中四大調和せず、身心共に勞疲する事を覺せば、心を起して應さに此の想を成すべし、譬へば色香清淨の輕蘇（今日の言葉で云へば上等の香水の如きもの）鴨卵の大きさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるはし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁腎骨次第に沾注し將ち來る、此の時に當て胸中の五積六聚、疝癰塊痛、心に隨て降下すること、水の下につくが如く、歴々として聲あり、遍身を周流し雙脚を溫潤し、足心に至て即ち止む、行者再び應さに此の觀を成す可し、彼の浸々として潤下する所の

歴々聲あり

唯心所現

餘流積もり湛へて、暖め蘸す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煮湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け蘸すがごとしと、此の觀をなすとき、唯心所現のゆるに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の輕觸を受く、身心調適なる事、二三十歳の時には遙に勝れり、此の時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず、若しそれ勤めて怠らずんば、何んの病か治せざらむ、何れの徳かつまざらん、何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる、其効驗の遲速は行人の進修の精進に依るらくのみ。

無臭の液體

衲は或人から、恁ういふ話を聞いた事がある、西洋の心理學者が、實驗心理の研究を爲す爲め、學校の教場へ液體の入つて居る一個の硝子瓶を持つて出て、生徒に謂つて云ふやう、斯の瓶中のもの非常に惡臭を放つ液體である、故に何ういふ臭氣がするか、諸君試みて見給へと云つて置いて、それから徐ろに瓶の栓を除

つたさうである、初めの内生徒は怪訝な顔付を仕て居たが、一人が仕、二人がする内に半數の生徒は申し合したやうに皆な鼻を摘まんだ、所がその實は無臭の液体であつたと云ふ事である、是の如く僅か教師の一言に於てさへ、生徒は無臭の液に鼻を摘まんだと云ふ位であれば、況してや、白隠和尚、白幽子の如き定力であつたならば、輒蘇が五臟六腑に沁み渡るに、歴々聲があつたであらう、而已ならず、「唯心所現のゆるに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き」と云ふ處杯も、篤と翫味す可きである。

希有の香氣

雲 水 物 語

は し が

禪宗が我國へ初めて傳來したのは今より七百年以前で、その抑々の開祖は京都建仁寺の開山榮西禪師である。尤もそれ以前に唐僧にして禪を傳へ、既に傳來してゐたのではあるが、傳はらなかつた。偶々傳へても二三傳にして絶系した爲め、歴史上では禪師が傳來者の鼻祖といふことに成つて居る。而して其榮西禪師は明年（大正參年）が正に其七百回諱で、建仁寺では今其準備中で、明春四月には一大法會が嚴修されるさうである。して見ると禪宗が我國へ渡來してからは、既に七百年以上、約八百年の歴史を有して居るものと言はねばならぬ。

禪の鼻祖

この八百年の歴史を有して居る禪宗は、我國の文明に幾何の貢獻を成し、又我

は し が き

國民の思想上に幾何の感化を與へたであらう歟。仔細に觀來つたならば、蓋し夥しいことであらう。先づ抑々建築の如きは、禪宗が這入つて來てから確に其様式を一變して居る、のみならず、抹茶とか、生花とか但しは武家故實といふが如きものは、我禪宗と密接の關係を有して居ることは隠れもない事實であらう。殊に又我國固有の武士道の如きものも、世間の人は多くは儒教の感化であるなどと甚だしき誤解をして居る人が澤山有るが、焉ぞ知らん、皆な禪の感化であつて、武士が禪宗を信じてから漸次に馴致し來つた所の一大思想である。然れば是等の事實をば一々出據を明にして記載したならば、定めて興味ある一篇の美術史、又は思想史が得られるであらうが、併し納は其方面の學者でない、最も本篇を一通り書き終つたならば、餘談として我が知る限りを記述して見ようとは思ふが、可成は其方面の研究は専門の學者に御願をすることゝして、茲には主として、雲水生活の一斑を記載して見ようと思ふ。と云ふのも、雲水の生活は一風變つた全く世

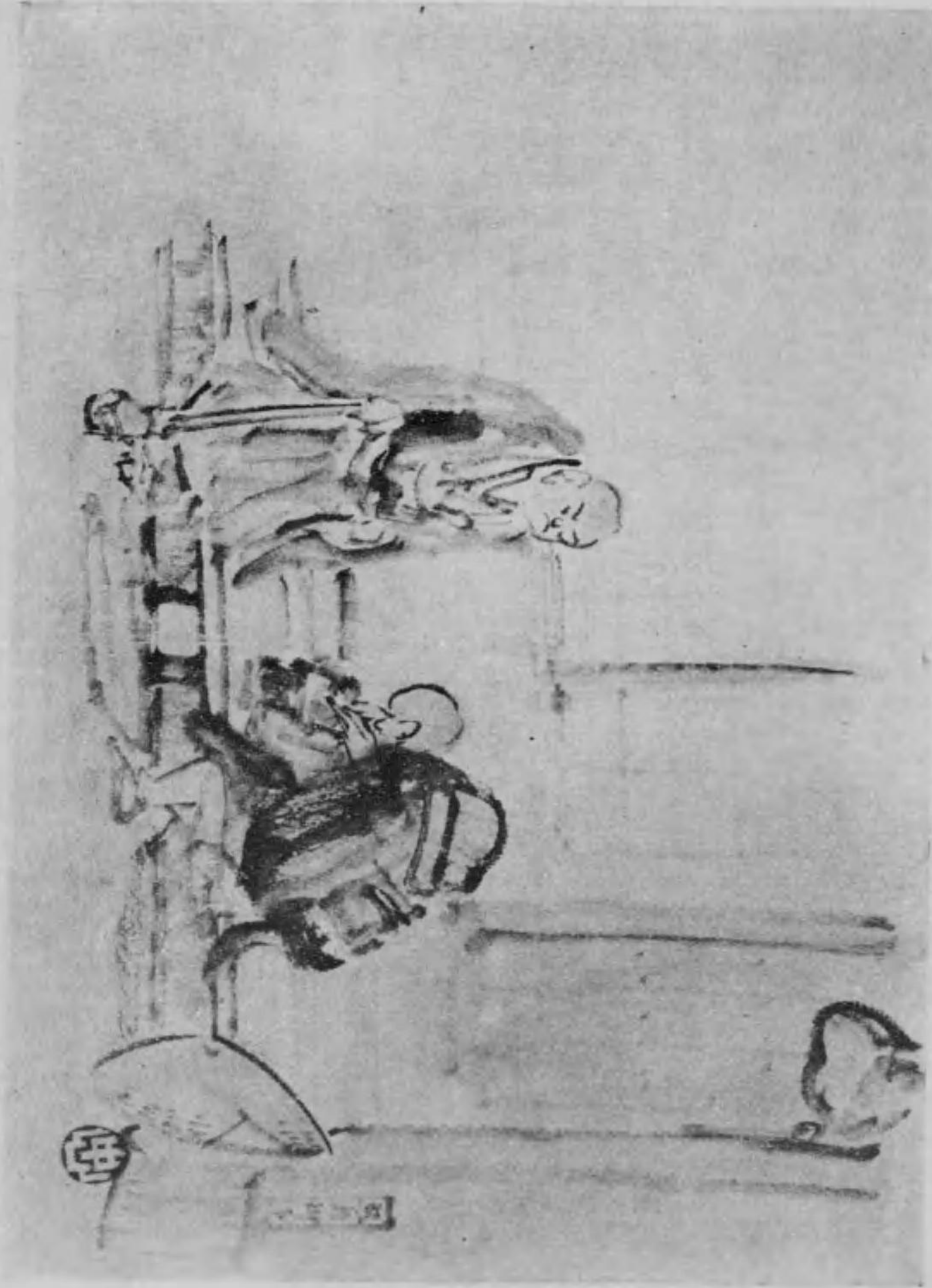
間離れのした生活であるから、僧堂内の事情又は禪の何物たるかを解せない人々に對しては、或は耳新しい事實ではあるまいかと思ふからである。世間には随分誤解者が多い、坐禪なんていふものは、畢竟するに好い加減なものだ。あれは一所の催眠術だ、イヤ謎だ位に考へて居る人があるが、誤解も亦甚しである、それと同じく、雲水は一種の乞食坊主であつて彼等は乞食するより外に何も知らない位に思つて居る人がある。其證據には吾々が雲水姿で汽車にでも乗ると、乗合客は吾々を見て直ぐ席を避ける。雲水は「將來の三界の大導師」畏敬して避けるのかと思つたら大間違ひ、實はキタない穢らはしいといふ感じを以て避けるのである。が雲水なる者は、左程に穢らはしいものでも、將又キタないものでもない。否彼等には節制あり規律あり、其節制規律は世の人が移して以て直に自己の龜鑑として足るものが幾らもある。雲水とは一體如何なるものか、又如何なる修行を爲す者か。いで衲は是より記述せん。

禪僧と禪機

禪寺の小僧

禪寺の小僧は十七八歳か廿歳前後に成ると、必ず行脚に出ることになつて居る。昔は寺から直ぐ行脚に出たのであるが、此頃は學校教育があるから爾うはいかぬ。で今日の順序でいふと、小學校を終へ、中學校に入り、更に大學(宗内の)に入つて一通り世俗の學問を修め、又宗乘を研究して、その上行脚に出ることになつて居る。が、今日ではマダ充分教育思想が普及して居らず、又同じ寺といふ内にも貧富の差があり、人間にも賢愚の別があつて、種々なる事情の下に、學校教育を受けずに直ぐ行脚に出る者もあるから、僧堂の雲水は全く龍蛇混雜玉石同架である。文學士の肩書を有つて居るものもある代りには、又手紙一本綴り得ない文盲の愚僧も居るといふ風である。併し如何に馬鹿でも阿呆でも、禪坊主となつたからには、如何あつても幾分かの修行が出来て居らなければならぬ、即ち幾ら

龍蛇混雜



三

三

賈坊主奴

『一寸御尋ねを致しますが、昨日娘は貴僧の引導を授つて定めし成佛したことでせうが、併し娘は只今何處に落ちて居るでせうか、此義確と承りたし』と、サア大變和尚グーの音も出ない。それと見て取つた其醫者は、『サア御返答は如何に』と詰めるが、和尚は不相變返答が出来なかつた爲め、ト、のつまり其醫者は和尚の禿頭を二ツ三ツ打毆つて、『エ、這の賈坊主奴、娘の落ち着き所も知らないで引導を授ける者があるかい』と、散々罵倒して歸つて仕舞つた、跡に取り残された和尚は、口惜しさに遺瀨もないが、それかとして如何とも詮術がない。乃で意を決して再行脚と出掛け、爾後二十年の刻苦を積んで、遂に近代禪門の碩徳と成られたといふことである。而して醫者が和尚を斯くさいなめたのは、和尚をして發憤させる底意であつたとも云ふ。或は然うであらう。

斯様に禪宗坊主たる者は、心眼を開いて、少くとも死後落ち往く先き位は心得て居らなければ、實の處引導一つも授ける事は出来ないのである。然らば其禪坊

道場

師家

主は如何なる規矩の下に如何なる修行をしなければならぬかといふに、それには嚴格なる規矩があり、又血の出る様な修行をしなければならぬ。

庭 詰

坐禪をする道場を禪堂、僧堂、叢林、又は専門道場ともいふ、京都では妙心寺南禪寺、天龍寺、大徳寺、建仁寺の各寺、地方では神戸の祥福寺、名古屋の徳源寺、美濃の正眼寺、虎溪山、九州では久留米の梅林寺、博多の聖福寺等が、即ちその専門道場である。道場には大勢の雲水を雷喝棒雨と、しゝき倒して接待する所の一人の大將がある。それを「師家」といふ。師家は十乗の人で既に修行事の濟んだ善知識である。雲水は是等の内何處かへ掛錫して修行せねばならないが、扱て其掛錫は直ぐ往つて直ぐ出来るかといふに、却々爾うは不可ぬ。初めて掛錫するには「庭詰」を一日半、「旦過詰」を五日間乃至一週間遣らなければならぬ。

庭 詰

庭詰とは、どういふ事をするかといふに、讀んで字の如く庭に詰めるのである。初めて掛錫するには：平素でも然うであるが：身装を一層嚴重に整へて往くのだ。即ち型の如き法服は勿論、脚絆甲掛を著け、網代笠を持ち、前には袈裟文庫、後ろには複子（荷物）を背負つて往く、そしてその道場の門前に著いたならば、門内からは又一層注意を拂つて威儀行相を整へ、肅々として進み、斯くして庭に這入つたならば、先づ庭の「上り縁」に腰を降ろし、頭を、前に掛けて居る袈裟文庫につけて充分蹲み込み、それから、聲を張り上げて「頼みませう」といふのである。スルト取次の者が「ドレ」と答へて出て来る。出て来れば低頭の儘で、可成物靜かに「私は何縣何郡何村何寺徒弟某甲であるが、何卒うか當僧堂へ掛錫が願したい」といふのだ。然うすれば取次が委細を聞いて奥に入り、其旨を知客寮（僧堂の總取締）の寮頭に取次ぐ、が寮頭は容易に承知しないで、「當僧堂は平素枯淡でもあり、又庫下（食物）も廻り兼ねる様な始末なれば折角の御

希望なれどもお断をする」と答へさせる。これが殆ど活版刷りの様に極まり切つた應接であるから、假し斯様に断られても、知らぬ顔をして袈裟文庫を掛けた儘、庭の「上り縁」に腰を掛け、低頭して、何等かの命令の下るまで待つて居るのである、が其命令は黄昏にならなければ下らないから、ものゝ一日も遣つて居ると腰が痛くなる、足が痺れる、眼が眩んで来るといふ風で、其辛らさ、悲しさ、並大抵ではない、監獄では入監の時と、出獄の時と、兩度共に三日間宛板の間の縁に坐らされ、身動き一も出来ないといふ事であるが、それも随分の苦勞に相違ないが、又僧堂の庭詰も一通りの辛抱ちや出来ない、僧堂と監獄とは何處かに能く似た所がある、先づ第一食物のまづい事、自由の利かない事、上長の命令には服従せねばならぬ事、規律の立つてゐる事、清潔な事、物靜かな事、至極能く似て居る、であるから、吾々僧侶仲間ではツイ監獄をお引合ひに出して、僧堂生活と監獄生活と、孰れが最も辛らからうと、忤と、嚙する位であるから、其一斑は推して

知るべしだ。

天龍寺の一夕

衲は忘れもせぬが、初めて天龍寺に掛錫した時、同僧堂の門前に佇んで、吾を忘れて泣いたことがある。

天龍僧堂
衲が初めて天龍寺に掛錫した時は、丁度峨山和尚の全盛時代で、雲衲が八九十名から居た、で、その手厳しい事一通りでない、衲が或日の午前八時頃天龍寺に著して、一日の庭詰を遣つた所が、大抵何處の僧堂でも、午後の五時頃には、鬼も角お上りなさいと云つて、上にあげて呉れるのに、天龍寺では昏鐘前に成つても上げない、さうかうする内に、日はズンブリ暮れて、早や室内には火が點つて居る、それにマダ上げないとは一體何うしたのだらう、と、終日の庭詰でスツカリ疲れ果て、身體が綿のやうになつてゐる衲は、最早氣が氣でない、此の有様で

出て往け

は多分忘れて居るかも知れぬ、エ、儘よと、思切つて『頼みませう』と一聲叫んだ、スルト『ドレ』と云ふ返事は聞えたが、一向出て來ぬ、暫くすると、一人の坊さんが、腰上げをなし、玉禪を取り、一本の警策（櫛の棒）を手にして、如何にも嚴然たる態度で遣つて來た。遣つて來て何をするかと思ふと、衲の衣の袖を引張つて『エ、何時までも何さらして居るんだ、出て往けと云つたら、出て往かんかい』と、ケンモホロ、の挨拶。

當方は修行

衲は是より先き名古屋の徳源寺に掛錫してゐて、僧堂の事は充分呑み込んでゐたのであるから、斯様に一喝を喰つても左程に驚かず、向ふさんはお役目、當方は修行、何なりと勝手に仰しやれ、私は此處を一步も動かぬといふ風で、庭の上り縁に喰ひ著いてゐた。處が喰ひ著けば著く程手厳しく追ツ立てる、到當根負けをして、引張られ乍ら、表門まで遣つて來て、今しも門の闕を跨がうとすると、その坊さんはドット衲の背中を一つ衝いて『もう再び這入る事はならんぞ』と、

天龍寺の一夕

ビツシヤリ門の扉を閉めて仕舞つた。是に於て衲は如何な事、ガツカリして仕舞つた、と云ふのは、何處の僧堂へ往つても斯くまでに殿しくはない、餘りと云へば餘りの仕打だと思つたからである。

頃は丁度十月の末つかた、秋の物淋しい夕まぐれで、肅殺の氣は犇々と身に沁み、晩飯は勿論喰べてゐない、殊に十九歳の初旅と来て、誰頼る者もなく、旅館に往つて泊まることは知らないでもないが、掛錫をしようと思へば、それは出来ず、今まで話に聞いてゐた、門宿と云ふは即今自分が遣らなければならぬ「ア、坊主といふ者は辛い者である」と、思つた時は、泣くまいと思へども、吾知らず泣いた。が斯くてもあらじと、空腹を忍びつゝ、袈裟文庫を解いて合羽や毛布を取出し門宿の準備をしてゐると、門の潜り戸を開けて一人の坊さんが現れた、其僧曰く、『そんなに仕ないでも再び這入つて庭詰をして居れば上にあげて呉れる』と、いと親切に教へて呉れたから、どうやらかうやら、門宿丈は免れたが、

門宿

感慨無量

其時位嬉しかつた事はない。

衲は幸ひにして先づ門宿を免れたが、其頃天龍寺に掛錫した者は、大抵二晩多い者は三晩位門宿をして居る、で先回天龍寺に峨山會のあつた時もツイ其話が出て、居合せた面々、當時を回想して孰れも皆感慨無量の體であつた。

且過詰

庭詰の事からツイ話は天龍寺の一夕談に移つて、筆が意外の處へ外れたが、又舞ひ戻つて、次には「且過」の事に就て少しく書いて見よう。

前記の如く庭詰をすること終日、その日の夕景になると、知客寮は「お上りなさい」と云つて、上にあげては呉れるが、マダ其僧堂の人とは成れない。其晩は投宿を願つて泊めて貰ふと云ふ格であるから、言はばお客様である。お客様ではあるけれども、一間に通されても、寢をべつたり、小歌を唸つたり、煙草を喫か

お客様

且過詰

す事杯は勿論出来ない、坐禪をして沈々黙々、咳拂一つも物静かにせなければならぬ。そして晩の勤行にも出て讀經し、藥石（夕飯）にも鉢盂を持つて正座に著かねばならぬ、朝の勤行も朝の粥座（朝飯）も亦その通りである。

翌朝粥座が済むと、知客寮からは一杯の番茶と二三枚の煎餅とを持つて来て「茶禮」と云ふ事を仕て呉れる。此の茶禮の式は「これを召上つて御隨意にお立ちなさい」と云ふ一種の挨拶であるから、又結束して出立せなければならぬ。で出立して門前に出て再び引返して前日の如く、庭詰を遣つて居ると、今度は大抵半日全體で一日半も行つたと思ふ頃、愈々上にあげては呉れるが、これで掛錫を許されたかと云ふと中々、今度は且過寮といふに投り込まれる。

且過寮は言はゞ一種の座敷牢である。此處では何ういふ事をせなければならぬかと云ふに、何も仕ないで只面壁して黙々打坐するのみである。書見する事も、喫煙する事も出来ない、勿論話相手は誰れ一人ない。そして三時の勤行と、三度

の食事時との外は一切寮外に出る事が出来ないのみならず、夜は九時に寝て、朝は三時に起きなければならぬから、随分の苦勞である。而してこれをする事五日間乃至一週間である。大抵の者はウンザリする。

禪堂修行は菩薩の修行

此頃の雲水は凡て新教育を受けて、一般に常識が發達して居るから、餘り無鐵砲な無茶な人間は居らないが、昔の雲水は随分始末にをへなかつた、こは管に雲水のみならず、俗人側でも然うであつて、昔の寺小屋時代には優れて居る者はズント優れ、馬鹿と來てはそれこそお話にならなかつたといふ様に、僧堂の雲水にも此傾向があつた、否雲水にはその傾向が一層甚しかつた。修行事の進む者は、ドシ／＼進み、進まないものと來ては五年経ても十年過ぎてても、見性一つ出来ないとか、或は修行は出来るが、併し婆羅助（惡戯）も人一倍遣るといふ雲助の様

な人間も慚くなかつた、乃でさういふ雲助流の人間は何等かの機關を設けて、さいなめてゆかねばならぬ、詰まり庭詰、且過詰は然ういふ娑羅助の雲水を善良な雲水に導く所の關所である。故に強ち掛錫の時に限らず、何か悪事のあつた場合に、懲らしめの爲に庭詰を課することは、今日と雖も屢次ある。

それから更に一つ庭詰且過詰をさせる理由といふのは、雲水に禁物なものは我見我慢である、禪堂の修行は菩薩の修行で、菩薩の修行は忍辱の業である、忍辱の業を爲す者に我見我慢があつてはならぬ、飽くまで我見を除き、我慢を取り去つて、赤子の心に立ち返らなければならぬ所から、遂に庭詰且過詰を強ひて、我見我慢を除らせるといふ意味もある。

參堂

斯くして庭詰も濟み、又且過詰も無事に勤め終ると、今度は參堂と云つて禪堂

へ送られる、禪堂は大勢の雲水が疊一疊敷の場所を貫つて、それを自分の天地として坐禪工夫する處の道場である。其處へ入れられて仕舞へば、其處で初めて其叢林の人となるのである。叢林とは大樹が茂生してゐる處を云ふので、一本や二本の木は決して林とは云はない、衆木が茂生して而もそれが互に排擠を事とせず、和合を保つてゆくやうに大勢の比丘が一所に集つて和合してゆくから、僧堂を叢林とも云ふ、元來僧とは僧伽の略で、和合を意味して居る、故に叢林に入つては先づ第一に和合を主とせねばならぬ。

參堂して愈々掛錫が許されたとなると、次にはその僧堂の師家に相見をし、相見の式が済むと、師家の室内に參禪して公案を授かる、其公案を授つて初めて禪の修行に取り掛るのである。

以上の記述に依りて、雲水が初めて僧堂に到着して、庭詰且過詰を終りて、愈々修行に取掛るまでの順序方法が、略ぼ了解されたであらうと思ふから、此次には

「公案とは何？」「見性とは何？」、「禪の功用如何」といふやうな事を、一通り記載して見ようと思ふが、然しその前に僧堂生活の概略を言うて置く必要がある。

僧堂の食物

世間の人は、どうかすると、雲水を批評して雲水なんていふ者は大飯を喰つて居睡り許り仕て居る者の様に思ふ人があるが、實際は却々爾うでない。成程彼等は、大飯を喰ふ、居睡りもせぬではないが、然しそれが彼等の日常生活の凡てではない。動物園の獅子や虎は肉食して居睡りをするのが仕事であるけれども、雲水は十方檀越の信施を受けて、個事究明の使命を負うてゐる禪門の修行者である。其者が大飯喰つて居睡り許り仕てゐては、それこそ來世には被毛戴角の牛と成るより外はない。

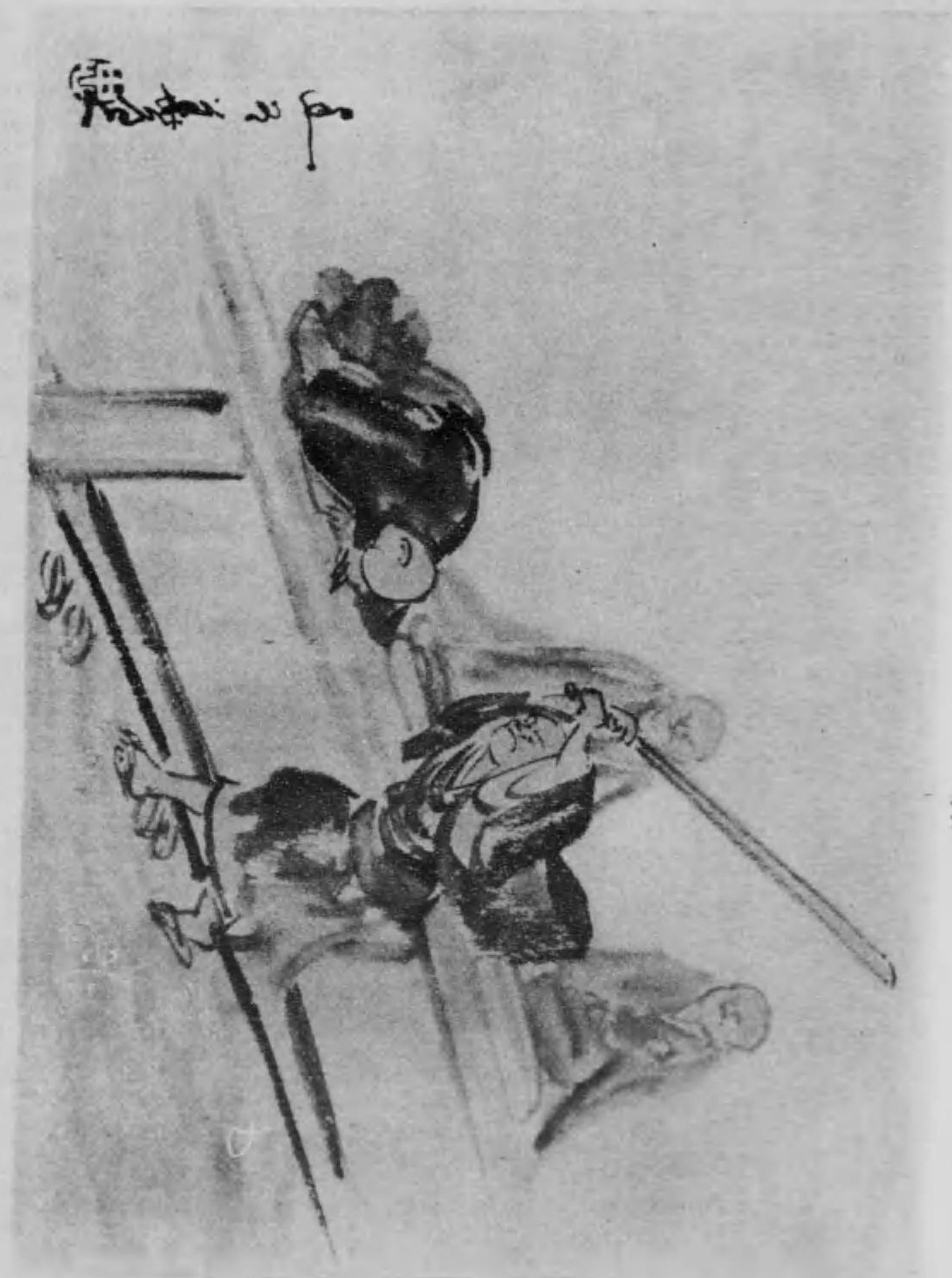
然らば雲水の僧堂生活は如何なる有様であるかと云へば、前云ふ通り並大抵の苦勞ぢやない。烈風骨を刺す返寒の候に於ても足袋穿く事は出来ず、シャツ著ることは出来ず、降つても照つても托鉢日には必ず出る。米搗き、麥搗きは樂なうち、或は「圓頭」と云つて田圃の耕作やら、「薪頭」と云つて薪作務やら、種々雑多の勞役に服従してゆかねばならぬ。而も其勞役は弱者も強者も等分に負擔せねばならぬから、少し弱虫の者は随分閉口する事がある。それかというて、逃げる譯にも斷る譯にもゆかぬ、其處へ持つて來て、平素の食物と來ては全くお話にならない。

僧堂の食物は何處の僧堂でも「二粥一飯」というて、朝夕の二回が麥の粥、晝飯が麥飯といふ事に決つてゐる。近頃は何處の僧堂も多少食物の改良が出來て、一般に良くなつて居るけれども、それですら、麥七米三の七分三は、上の部である。而して副食物はと云ふと朝夕が澤庵の萬年漬、晝飯が赤味噌汁、其他には何物

もない。

納が天龍寺にゐた時は、大衆が八九十人からゐた。寺不相應の満衆で庫下（食糧）が、廻り兼ねる故でもあつたらうが純麥のズル／＼粥と来て、全くの天井粥、天井粥といふのは天井が粥に映るといふのだが、實際はそれ以上で箸要らずである。麥飯も亦其通り、米杯は顕微鏡で見たいとて無い、それ位ひどかつた。乃で納は能く人に話すことである『納が天龍寺に居た時位、まづい物を喰つた事はないが、又それと同時に天龍寺にゐた時位、うまい物を喰べたこともなかつた』と、それは何ういふ譯かと云へば、二時の粥飯が既に前述の通り故、逆も口に適はないが、然し又同僧堂の茶粥と来ては格別であつた、三斗からの米を初めに茶飯に炊いて、今しも大衆に喰はせようとする際、沸騰せる番茶を注ぎ入れて、茶飯と茶粥の合の子に拵へたので、それを富士山のやうに盛つて其前に坐つた時の嬉しさ、又それに箸を執つた時のうまさ、實に何とも云へない……。

天井粥



時

時

といふのも、茶粥その物が左程においしいかといふに、必ずしも爾うでない、平素の食事が食事であるから、些細の御馳走でも、是の如くおいしいのである。平生勤めて枯淡にして居れば、一寸した御馳走でも、うまく喰べられるが、榮耀して居ると、假し其の御馳走が山海の珍味であつても、雲水一椀の茶粥にも値せぬ、誰れやらが云つた、「まづい物喰つてうまい物喰ふ百姓、うまい物喰つてまづい物喰ふ華族」といふのは、真に千古の格言である。

禪僧と大食

斯様に僧堂の雲水は平素非常な粗食を行つて居る、で世間の人は、それでは身體が衰弱して元氣が無くなるであらうと、思ふ人があるかも知れないが、其處が流石に禪宗坊主であつて實際は爾うでなく、元氣は益々旺盛である。角力をとらせても、亦他の勞働をさせても、人一倍遣る、惡戯も仕兼ねぬ。雲水と惡戯、

禪僧と大食

雲水物語

これも昔から有名である。天龍寺の故峨山和尚が雲水時代に雪隠の扉を外して、
餛飩を打つたとか、建仁寺の現管長默雷和尚が、二三の朋輩と共に、内證でゴ
モク飯を炊いて、イザそれを移さうとしたが、お生憎様櫃が無いと来て、窮餘の
窮策に手洗鉢に移した杯といふ、罪のない悪戯は今時の雲水間にも屢次ある話
だ、凡てが此調子で毎時もかも元氣であり、始終消げ返つて悪戯一つも仕得ない
杯いふ者は、先づ殆どない。

尚ほ又昔から「禪宗坊主が齋に附いたやうナ」といつて由來禪坊主と飽食とは
鑿といつたら金槌といふやうに、クツツイたものであるが、不思議な事には、そ
の飽食を遣つても、彼等雲水は頓と胃腸を害せない、それには自ら理由がある、
といふのは、坐禪の修行は腹部の運動を盛んにやらかすから少々の飽食位は少
しも差支へないのである、がその代り放屁をやる事も夥しい、蓋し放屁は麥飯
の生理的結果であらう。坐禪と大食、これが抑々禪門修行者に神経患者の尠くない

所以である。

雲水の威儀

又僧堂では軍隊のやうに、萬事が規則づくめであつて、規則を離れては何事も
出來ぬ習慣に成つて居る、同時にその規則や作法が又頗る嚴重である。坐禪の時
は坐禪の作法、食事の時は食事の作法があるが、その作法は小磬一つの打ち方
で、或は立ちもし、坐らせもするといふ風ですが、それが又百人居ても二百人居て
も、一絲紊れず、スラ／＼と行はれて往く、殊に一層見事なのは、雲水の食事時
である。

食事をする際には、箸の音は勿論、假令香の物の如き音のする物を噛む時と雖
も、ムツともさせてはならぬ規則であるから、假令人數が如何様に多く共、寂と
して恰も水を打つたる如き静けさである、此に慙ういふ話がある、往昔蘇東坡が

雲水の威儀

或る禪寺に往つて、雲水の食事時を見た、其頃は宋時代の禪宗の最も盛んな時代であつて、一ヶ寺に何百人といふ雲水が居り、その大勢の雲水が一堂に集つて食事をするのに、箸の音一つさせなかつた爲め、東坡は非常に嘆賞して、「嗚呼三代の禮樂は緇衣の裏に在り」と云つたといふ事である、これは僅に一例であるが、是の如く、僧堂の規矩なるものは、何に彼に附け能く行届いてゐる。

實行主義の教育

又僧堂では「脚下を照顧せよ」と云つて、脚下に氣を附けることを八釜しくいふ風がある。何故脚下を八釜しく云ふかと云へば、脚下に氣の附かないやうなものは、假令修行事に如何なる進境があるとも、それは僅に悟つた、公案を透過したといふに止まつて、畢竟するに何等の役にも立たないからである。悟つた所の「悟りの理窟」と、日々の行實とがビツシャリ／＼合うて往つてこそ、お悟りも

値打があるのに、只僅に悟つた許りで、日々の坐作進退がそれに伴はないでは、其悟りは所謂「實のない悟り」で、悟ると雖も悟り甲斐がないからである、で禪宗では行解相應といふことを云ふ、即ち行と解とが相應せねばならぬと云ふので、日常の進退動作は最も八釜しく云ふのである。例へば下駄を一つ脱ぐにしても、チャント揃へて脱ぐとか、或は草鞋を解くにしても、チャント腹合せに括りて、可成人目に附かぬ庭の隅つこの方に置いておくとか、いふ事柄がそれである。禪の修行は實地の修行で躬行實踐する所に値打があるからである、ものゝ道理を能く承知して居て、それで尙ほ實行の出来ないのは、譬へば「繪に書いた牡丹餅」である、繪に書いた牡丹餅！ 畢竟何爲るものぞ、是に於て乎僧堂では専ら實行主義の教育を施すのである。

陰徳主義の教育

僧堂の修行は實行主義であると同時に、又陰徳主義の教育である。陰徳あれば陽報ありであるから、出世を仕よう、徳を積まうと思へば、陰徳をしなければならぬと云うて、陰に陽に之れを推奨激勵するのである、故に僧堂の雲水中には前にも云つたやうな雲助のやうな婆羅助も居る代りには、又眞に景仰すべき意外の陰徳家が居る。先づその一例を示せば、他の雲水が越禪を洗濯しようと思つて、水に浸けて置けば、それを知らぬ間に洗つておいて遣るとか、下駄の鼻緒の切れたのがあれば、それを人知れず、上げて置くとか、いふやうな類である。斯ういふと世間の人は嘘だらう、今時の人間に他人の越禪を洗濯するなんテ、そんな殊勝な者があるもの歟、と思ふ人があるかも知れないが、決して然らず、現時の雲水間にも是れしきの陰徳を積む者は左程珍らしくない。

此頃世間の人は滔々として華奢淫逸に流れ、陰徳思想なんぞ殆んど棄にしたくもない有様であるが、實に慨嘆に堪へぬ。陰徳といふのは、別に六づかしい事でも

も何んでもない、只物を大切に作る、粗畧には仕ないといふのが、それである。

この粗略にせぬといふ考へ、即ち陰徳思想が有るのと無いのとで、人間一生の裡に損得をすることは、夥しい事である、だから衲は常に思ふ。吾等はその富人たると貧者たると貴紳たると下賤たるとを問はず、何うしても、此の陰徳思想が無ければならぬと。のみならず、先づ思つても見るが宜い。米一粒と雖も、仇や疎かでは出来て居ない、紙切れ一つと雖も、その通りである。然るに如何に澤山有るからとて、又は錢さへ出せば何時にても求められるからとて、無暗矢鱈に亂費して宜いものであらう歟。勿體ないとか、冥加に盡きるとかいふ考へは、人間に無くてならぬ尊貴なる心掛けではあるまいか。

古徳の潜行密用

陰徳の話に就て、衲は古人の逸話を一つ二つ記述して見る。昔し支那に薬山

古徳の潜行密用

(石頭下の一人)といふ一人の大宗匠があつた。此人は非常な陰徳家であつて、食物の廢たるのを惜み、毎夜コツソリ典座寮(臺所)の流し下に往つて、箒を受けて置き、若しも米粒又は青菜の端切れ杯があつた場合には、それを人知れず持ち歸つて、内證で室内で炊いて喰はれ、斯くして一生陰徳を積まれた爲、その子孫たる曹洞宗は後來大いに榮えて來たといふ話である。又妙心寺の開山無相大師も、非常な陰徳家であつた、或る日天龍寺の開山夢窓國師が朝廷へ參内の砌り、妙心寺の門前を通られた。國師は不圖思ひ出して、『オオ此處には關山和尚(無相大師)が居る筈だ。久しく御無沙汰をして居るから、一度訪問して上げよう』と思つて、七寶玉の御輿より降りて、妙心の門内に入られると、豈圖らんや、關山和尚は見悄ばらしい身装をして境内の掃除をして御座る、夢窓の顔を見るや、破顔一笑、『これはく、お珍らしい、まあく』と云つて案内して客間に通された。客は天龍寺の夢窓國師、七朝の帝師とまで仰がれて、京師幾萬の道俗が隨喜渴仰の涙

を注ぎつゝある大珍客である。然るに關山和尚は極めて冷靜なる態度で、國師に番茶を酌み、お剩けにマダ茶菓子が無いと云つて門前の婆さんが賣つてゐた、焼餅を買はせて來て、それを硯箱の蓋に上せて差出された。實を云へば、それ所でない、夢窓國師といふ既に大珍客であるから、お茶は上別儀のとつとき、菓子はさしづめ虎屋の饅頭と出て來なければならぬ所を、關山和尚は平氣の平左で、番茶と焼餅の饗應とで濟まされた。乃で夢窓國師他日人に語つて『我法は關山に奪はれたり』といつて、強たか嘆息されたといふ話がある。

夢窓は仁山古山二大居士の歸依を受けて、其君臣を化導し、頗る豪華の風があつた。關山は一蓑一笠、常に冷湫々地に住し、宗旨の外眼中何物も無き一質樸漢であつた、前者を以て櫻花とすれば、後者は梅花、前者を吹毛劍とせば、後者は鐵槌、前者を綠水とせば、後者は青山といふ工合に、二師の出所は自ら同じくない。その同じからざる所には、一大深意がある、故に『易地皆然』の四字は二師を

評して或は誤らざるものであらう、故に其跡の異同について彼此申すのではないが、何にもせよ、現時の妙心は夢窓國師が道破された事が、全く事實と成つて現はれて居る。即ち妙心は末寺といふ上から云つても、臨濟宗中の出色者であり、法脈といふ點から云つても、最早唯一無二である。

といふのは、如何なる譯かと云へば、昔は二十四流日本の禪と云つて、支那から日本へ禪宗を傳法した人は榮西を初めとして二十四人有つた。所が當初さしに榮えた東海日多の禪も星移り物變りて時に消長なき能はず、或は三四傳して絶系し、乃至は十數傳して絶系しといふ工合に、何時の間にか絶系して仕舞つて、現今では關山一流の法脈しか残つて居ない。即ち法といふ點から云つても、妙心が最後の占有者と成つた。

斯く妙心寺が臨濟宗中の最優勝者（法の上に於ても物質の上に於ても）となつたのは、全く關山和尚が陰徳を積んで後世に遺された恩資である歟。但しは後世

兒孫が努力の結果である歟、其處は一概に申されぬ。恐くは二者皆その一因であらうと信するが、先の夢窓國師の話が、餘りに荒唐不稽の事であるからとて、これを一舉に否定することは出来ないと思ふ。

古人陰徳の逸話に就ては、此外にマダ、澤山ある。妙心寺山内龍華院の無著和尚は、御布施紙をムザ／＼反古にして仕舞ふのは、勿體ないというて、字の書いてある所丈けを切り棄て、餘白の分を縫ぎ合して、それへ一代の名著禪林象器箋といふ二十餘巻の大著述を書かれたとか。或は又天龍の峨山和尚が、雨の降る晩、雪隠の雑巾桶を雨垂れ下を受けて置いて、水が一抔になるまで坐禪して、一杯になると、雪隠の掃除をせられたといふ話杯は、皆な人の知る所である。是等が古人の所謂潜行密用であつて、恚ういふ事が、不知不識の間に自然に出来るやうにならなければ、悟道もマダ本物ではない。悟道はそれを潜行密用する所に光を放つ。

僧堂内の徳義

玄秀老師

いま一つ僧堂内の徳義といふ事に就て、記載して見よう、衲は小僧時代に、今の臺灣臨濟護國寺の住職、梅山玄秀老師から、斯ういふことを聞かされたことがあつた。『禪宗坊主は修行が出来なくても宜いから、少くとも三年以上は僧堂に這入らなければならぬ』と、衲の單純なる幼少時代の考へでは、僧堂は見性悟道する道場である、然るにその悟道が出来なくても好いから尙ほ僧堂に入れといふのは、恰も學問は仕ないでも好いから、學校に入れといふのと同じ筆法であるが、一體譯が分らぬと思つて、衲は『それは又何うした事です』と問ひ返した、スルト老師は『悟道が出来ないにしても、僧堂には僧堂の徳義がある。その徳義を何時の間にか自得して來るから、僧堂には是非共這入らなければならぬ』と云はれたが、これを聞いた其時代には餘り感心も仕なかつたけれども、其後自分が僧堂

護法心

隱元

僧堂内の徳義

に入り、及び寺に住職するに至つて、初めて老師の言はれた事に敬服せざるを得なかつた。如何にも僧堂には一種の徳義がある。其徳義はそも如何なる徳義かといふ事は、此處で概括的には一寸申し悪いが、しかし僧堂に長く居た人は何處かに物に親切な、普通の人とは一種異つた所がある。勿論僧堂家には缺點もある。それを摘發せば幾らもあるが、それは強ひて剔抉する必要もあるまい、で其の好い方面にのみ就て云へば、第一護法心に厚い、この護法心に厚いといふ事が僧侶に取りて最も大切である。護法心は信仰である、近頃學校出の者には、何うかすると、釋迦何人ぞ、我何人ぞを振舞はして、お經を讀むとか、佛様を大切にするとか、いふことを仕ないが、是等は宗門の賊である、僧侶は狂人と罵られ、非文明と嘲られても、何處かに佛大事といった風が無ければならぬ。昔し黄檗の隱元が毎日佛殿に於て、百禮を遣つた、或る人が『何に由つて是の如くなる。』——貴僧は何うしてそんなに禮拜をなさる、未來が恐ろ

しいのか』と問ふたら、隠元は『是の如きによりて、是の如し、——俺れは恐ろしいとも何とも思はずに行つて居る』と言はれたさうだ、此の何共思はずに行つて居るといふ所に、實に云ひ知れぬ味ひがある、即ち理窟を超越した所に平素の行狀が整つてゆかねば駄目だ、勿論僧堂家は悉く之れが出来るといふのではない、が長い僧堂生活の裡には自然とその躰けが出来て、何處となく、法に親切な所があるやうに成る。

次には、何かに付け心得がある。例へば物を一つ云ふ場合に於ても、充分云ひ切らず、八分丈け云つて跡の二分は相手の者に悟らすとか、或は酒を飲んでも亂に及ばぬ程度で止めて置くとか、又は大勢の小僧杯が部屋に這入つて駄法螺を吹いて居る、さういふ際その内の一人を呼ぶに、障子を開けて裡の小僧共を驚かすやうな事をせず、外部から命令を下して去るといふが如き、又は周章た場合と雖も、脱ぎ棄てた下駄の揃はぬ事は無いとか、何か知ら、僧堂家は一擧手一投足の

間にキチンと威儀の整つた所がある。これも亦僧堂家は悉くさうした嗜みがあるといふのではないが、併し幾分か恚ういふ心得があるのである。

其他掃除を鄭寧にする。料理の心得がある。といふやうな事も亦僧堂家の一特色である、恚ういふ心得が僧堂に居ると自然と身に附いて来るから、今度僧堂を出て、寺を持つた時、即ち苦しい世帯の杓子を握つた場合に、僧堂の修行が實地に働いて来て、僧堂の難有味がポツポツ知れる事になる、玄秀老師が禪坊主は是非僧堂に入らねばならぬと云はれた事が、一層痛切に感せられて来る。

逸話 三則

禪宗坊主が僧堂に居て、如何なる教育を受けるか、修業事(お悟り)の出来る出来ないは、別問題として、雲水が師家より如何なる鉗鎚を受けて人と爲るかといふ事に就て、讀者諸君の參考迄に二三の逸話を紹介して見る、テ僧堂の活教育と、

今日世間の學校教育とを互に比較して貰ふのも更に一層妙であらう。シテ話は何時もかも峨山和尚を引合に出すが、これも已むを得ない。

峨山和尚が或る夏の午後書見に倦んで、不圖縁先きに出られた、すると侍者(給仕)の者が手洗鉢の水を汲み出して居た、和尚一見便見、其汲み出し方に如何にも不用意の所があると見て取つたから、早速侍者に向ひ「コレ、お前、物には凡そ死活の二途がある、お前のやうに、イクラ不用の水だからとて、只無暗にカイ出して居ては、物を死なして了ふといふものだ、その水を庭前の木々や盆栽、又は地面に撒布しつゝ、カイ出して見よ、樹木も喜べば地面も悦び水も活きて来る。修行する者は、恚ういふ處に氣が附かねば不可ぬ」と云はれたといふ事であるが、如何にも其の通りである。此心得を吾人が造次にも頓沛にも忘れなかつたならば、身を益すること果して幾何であらう歟。又機を見て法を説く必要も蓋し此にある。

修業者の心得

禪さん

典座の寮頭

又和尚に就て恚ういふ話もある。和尚の雲水時代は昌禪と云うて、呼び名を禪さんと云うた。禪さんが美濃の伊深に修行中、マダ初心で齡で云へば、十六七の頃、或る年の冬夏に典座寮の加役に這入つた。其頃伊深には大衆が七八十名から居て却々の満衆であつたのである。禪さん當番に當つて御飯を炊くのに、實に忙しくて堪らない、米を研ぐ、釜を洗ふ、火を爨く、又雑巾掛もせねばならぬといふ風で、それからそれへと、追ひまкруれ通して、實に煙草一服の閑もない。それをば寮頭さんが手傳つて遣れば好いのに、それもせず、乃公は非番だ、といった顔付で典座寮に寝轉んで居て、而も時々意地の悪い小言を云ふ。禪さん既にヤケ氣味に成つて居る所へ、或日の事寮頭さんが、典座寮に寝て居て、蒲團の中から、ノツソリ頭を出して「オイ禪さん、忙しいかい」と云つたさうだ、禪さん聲に應じて「ハイ忙しくて堪りません」と答へると「さうだらう、お前さんは大分無駄事を遣つて居るわい……」と云つたさうで、慧敏なる禪さんは、忽ち感じ

た。即ち無駄事の一語がウント胸に響いたので、爾後何んでも無駄のないやうに
 ないやうにと働いた爲、初め七時間掛つた仕事、後には三時間で出来るやうに
 なつたと云ふ事である、何事にも慣れといふ事はあるが、而し又思案が大切だ。思
 案して順序正しく働けば、水を一つ汲むにしても、十杯汲まねばならぬ所が後ら
 には五杯で済む事になる。即ち仕事の經濟を自然に自得して来る。
 又恚う云ふ話もある。博多の聖福寺に今より七八十年前以前に仙崖和尚といふ、
 名僧が居られた。此人が聖福寺に居て大勢の雲水を接待して居られた時、その衆
 僧の内に夜間竊に塀を乗り越えて、同市の花街に遊ぶ者があつた。此事何時しか和
 尚の知る處となり、一夜和尚彼等の歸へる時刻を伺ひ、兼ねて塀の間に踏臺が
 置いてあるのを見て、身自ら其傍に黙然端坐し、以て其の歸へりを待ちつゝあつ
 た。神ならぬ僧等は、それとは露知らず、闇中僅に踏臺を摸索して塀を降りた所
 が、一人の坊主が端坐して居る、ハテ怪しからぬと思つて能く熟視すると、我師

仙崖和尚である。此の時和尚大喝一聲、這の畜生！と一棒を呉れるかと思ひの
 外、聲を竊めて『早く歸つて風を引かぬやうにして寝ろ』と、唯つた此の一言あ
 りしのみ、是に於て乎、平素眼中に人なき雲水、守家無公の豪の者も、これには強
 たか驚き、且つ悔い且つ愧ぢ、爾後花街に遊ぶ者、絶えて一人も無かつたと云ふ
 事である。

是等は僅に一例であるが、僧堂の教育は凡てが此の調子である、教育も此處ま
 でこなくては活教育とは謂れない、今日世間の學校教育は、教師その人が既に學
 問切り賣り主義の人が多いから、何うしても教育の實績が擧げられないけれども、僧
 堂では、生徒たる雲水が、先生の師家を見ること、恰も神か佛かの如き觀があつ
 て師家の一言は鶴の一聲と響くから、教育といふ點から云へば、實績は寧ろ擧げ
 易いのである、で柄は毎時もさう思ふ、學校教育に僧堂教育を加味したならば、
 何うであらう歟と、尤も學校と僧堂とは性質を異にし立場を異にしてゐるから、

一概に論じられぬ事は勿論であるが、併し學校の寄宿舎には随分僧堂主義を用ひて、補益する所が澤山にあると信ずる。

禪堂の日用規定

日用規定

納は上來十數章に亘つて、雲水生活の一斑を叙述し來つたから、最後に僧堂の日用規定を示して、讀者の參考に供することゝしよう、僧堂には禪堂規定、常住規定、侍者寮規定、且過寮規定、食堂規定というて、雲水がそれ々の場合に於て嚴守せねばならぬ所の規定がある、それ等の諸規定を一々紹介するは餘りに煩はしき故、左に日用規定を掲載することゝした、此の日用規定は雲水の誰彼を問はず、何人と雖も遵守實行せねばならぬ所の規則で、これを見れば、僧堂の規矩が如何に嚴密であるか、又如何に細心である歟といふことが略ぼ窺知せらるゝであらう。僧堂の内情を知らんと欲せば、少くとも此の日用規定を一讀する必要が

欠

欠

禪とは何ぞ

禪は不可説

玄妙不思議

衲は前章に於て、雲水生活の一般を敘述したから、次には順序として「禪とは何ぞや」といふ根本問題に就て、聊か所見を披瀝して見ようと思ふ。即ち雲水が修する所の禪は、世間一部の僻見者が邪推して居るやうな、空々寂々、殆ど枯木死灰にも均しきもの歟、それとも亦玄妙不可思議、確に一種の活機を有するもの歟と云ふ事を、可成素人の人に了解し得るよう、説明して見ようと思ふ。が併しそれ以前に先づ、禪は不可説のものであるといふ事を一言して置かねばならぬ。

●●●●●●
禪とは何ぞや、といふ質問に對して、これに答ふるには、實際は易々たる事で、僅に一言以て答へ得る。即ち州云無と云つても好し、隻手音聲と云つても、將た

禪は不可説

禪とは何ぞ

又庭前の柏樹子と云つても好し、何と答へても差闕は無いのであるから、その答案は至極簡單であると云へば、如何にも簡單であるに相違ないが、それはお互見性悟道の道に明かると知音居士の間柄で云ふ事であつて、ムツ知らない門外漢に對しては、何等答案に成つて居ないのである。門外の人に、禪とは隻手音聲なり、禪とは庭前の柏樹子なりと云つた所で、其の人が果して了解する事が出来る歟と云へば、決して了解は出来ない。して見れば、答案に成つて居ないが、然らば其の答案には如何に答へる歟、又如何にしたならば、了解する事が出来る歟と云ふに、此の禪許りは全く不可説のものであつて、如何にしても説き聞かすことの出來ないものである、故に古語にも『我宗に言句無し、一法の人に與ふるものなし』とある。その一法の人に與ふるものなきものを、凡ての禪書では、それに辯明を加へ、せめては萬分の一なりとも、髣髴せしめようと云ふ考へで、説いてあるから、讀んでも分らぬ、分らぬのが當然である。

何故禪は幾程説いても、分らぬかと云ふに、禪には説いても、説き盡せぬ所がある、例へば鹽は鹹いと云ふ、その鹹さは何ういふ鹹さである歟と云ふに、未だ一度も鹽の鹹味を経験して居ない人に對しては、その鹹味は然かくであるといふ事が、説き盡せぬと同じ事である、鹽の鹹味は唐辛の辛味とも違ふ、又生薑山椒の辛さとも違ふ、その鹹さを教ふるには言語や文字や、手眞似足眞似では説明し切れぬから、請ふ先づ須らく、翫味す可しと云ふより外に、仕方の無いのと同じの筆法である。であるから、先づ最初は禪は不可説のものであると云ふ事を、御承知置きの上に讀んで頂きたい。

更に又一言注意しておかねばならぬ事は、前陳の如く、禪は不可説のものであると云つても、或る程度迄は語り得るのである。既に語り得ればこそ、古人には語録と云ふものがある、而已ならず、古來禪に關する書籍は、汗牛充棟も管ならずで、夫等幾千餘種、幾萬餘卷の書籍は、何の爲に作られた歟と云へば、皆な禪

禪は不可説

禪とは何ぞ
を説明し解釋したものに過ぎぬ、然かれば、不可説とは云へ、語つて語れない筈
はないのであるが、併し禪の妙處は語ることを戒むる、故に禪のことを話す人
も、イザ急所と云ふ段になれば、決して言及せず、言及せずして相手に悟らすと
言ふのが、我禪宗門下の遺方である、之れは濫りに禪の奥義を秘めて、亂投亂發
を避けると云ふ、固陋姑息の手段でなくして、言はぬ語らぬてふ事が、禪を護す
る者の徳義である、で衲が禪とは何ぞやと大仰な意氣込みで書き立てた處で最後
の寶城はこれを明け渡すことは出来ない。これは前にも云うた通り、鹽の鹹さを
筆で書くのと同一般、到底衲等の文字の力では不可能事であるからである。併し乍
ら本篇を熟讀翫味すれば、禪の何物たるかは、髣髴と判る位ゐの處までに行ける
だらうと信する、何も鼻を齧めかす譯ではないが……。

一知半解の徒

併し衲は是に於て、一言警告して置かねばならぬ事がある。前述の如く、禪は
不可説のものであり、又その急所は語ることを忌むと云ふ點からして、ともする
と、世間には誤解して種々なる揣摩憶測を逞うする輩がある。禪は一種の謎であ
るとか、甚だしきに至つては、禪は一種の催眠術であるとか、取つても附かない
變語を吐く人があるが、禪はそんなアザトイものではない、入れば入る程深く、
究むれば究むる程妙味の津々たるもので、殆ど奥底の知れないものである。故に
禪は宇宙を達觀する所の一種の哲學、即ちお悟りであると云ふ位の事は、曲げて
も覺悟して置かなくては本編を讀んだ所で何の效もない。

それから愈々玉手函を開くかと云ふに中々さうテンドロ安くは參らぬ。未だ小
言がある。禪は是の如く、不可説のものであるに拘らず、今日一廉の學者で、而
も相當名の聞えて居る人が、未だ禪の何たるを解せずして、無暗と難透難解の公
案を振り舞はし、公衆の面前で、喋々演説する似而非居士がある、否居士のみな

一知半解の徒

らず、僧侶の内にも、さうした廣僧侶があるが、是等は大に誠む可き事であると思ふ、一廉已透底の人ですら、濫りに饒舌を弄すれば、我が禪門では、人を誤り己れを謬まると云つて、深く之を誠むるのに、一知半解の徒輩にも及ばぬ局外漢が、濫りに禪を説く杯、實に沙汰の限りである。これも序であるから、一言して置く。

禪とは何ぞ

公案の説明

偕て話頭は初めに返る。禪とは何ぞやと云ふ事を語るには、勢ひ公案の説明をしなければならぬ。故に先づ公案の字義の解釋から始めよう。中峰和尚は、公案とは公府の案牘、即ち役所から出す所の書附けのやうなもので、國に國憲あり、その國憲の備不備に由つて、其國の治亂興廢が卜知せらるゝ如く、古聖賢が履踐せられた道を標準として、禪門の正不正を裁斷して行くのが、公案であると云う

て居られる。而してその數はと云へば、昔から一千七百則の公案と云ひ傳へて居る。必ずしも千七百則に限つた譯でなく、公案とは、無數無限で、森羅萬象、悉く公案ならざるなしであるが、兎も角昔から、一千七百則の公案として定り切つた問題がある。

この公案に緩急難易の區別がある。即ちいろはの公案もあれば、又難透難解と云つて、それこそ爪も齒も立たない難題もある。公案に難易がある如く悟り方にも、頓悟と漸悟との區別がある。今日の臨濟禪は頓悟と云ふ事に成つては居るが、實際は漸悟である。昔は此の頓悟の禪を漸悟の人は罵つて、鍋蓋禪と嘲り、漸悟の禪を頓悟の人は嘲つて階子禪と云うたさうである。何故頓悟を鍋蓋禪と云ふかと云へば、頓悟の方は、練りに練り、究めに究めさして置いて、容易に許さず、最後の一關に達して機縁充分に熟するを見るや、忽ち辛辣なる手段を弄して、一舉に免許皆傳して仕舞ふ、それは譬へば物の熟する迄容易に蓋を去らず、ソレ今

公案の説明

煮えたと云ふ所で、一擧に蓋を開けるやうなものであるから、頓悟禪を鍋蓋禪と云ふのださうだ。次の漸悟禪を階子禪といふのは、階子を一階段づつ、攀ち登るやうに、一則は一則毎に免許してゆくから、然か云ふので、元とく鍋蓋禪、階子禪と云つて、お互に嘲笑し合つたのは、孰れにも一弊があるからである。が弊害あれば、又利も潜んで居る。利と弊とは必ず相伴ふもので、兩者の好悪は一概に論せられぬが、併し乍ら、悟りと云ふ點から云へば、漸悟よりは頓悟の方が人間が宜い。二十年三十年の苦節を忍んで、晝參夜參、怠りなく力めて居つたが、一朝何かの機縁に觸れて豁然大悟した杯と云ふと、如何にも痛快であるから、仍で臨濟禪は頓悟禪を標榜をしては居れ、實際は漸悟禪である。此の漸悟禪は、衲の見る所を以てせば、是禪の墮落に非ずして、寧ろ進歩と見るべきであらうと信ずる。今日の人間に頓悟禪を望んで見た所が、それは出来ない相談である、出来ない相談に無駄骨折をさすよりは、寧ろ秩序を追ひ、漸々に教育して其間に練ら

せ、即ち興味を感せしめつゝ修行させて、愈々最後の「一重關」に達した時、最後の篩に洩けて、以て禪の妙諦を自得させるのが、遙に時勢に適した遣方である。以上は衲が公案の説明に就て頓悟禪と漸悟禪との區別を、只一言したに過ぎないが、それは扱て措いて、今日臨濟禪に初めて參禪する者に、授ける所の公案とは、一體何う云ふ風のもの歟、次章に於て、二三實例を擧げて、その梗概を説示して見る。

公案の内容

數多き公案の内には、種々雜多のがあるが、初心の者が皮切りに授かる處のもの、多くは無字か隻手かである。

趙州因僧問狗子還有佛性也無州云無

これは趙州無字の則というて有名な公案である。この公案の意味は昔し支那に趙

公案の内容

州といふ大善知識があつた、或日の事一人の雲水が遣つて来て趙州に問答を仕よ
うとした、折りしも其處に一匹の犬が居つたから、直様其犬を問答の材料に使つ
て、『若し和尚さんお訊ねを致す、吾々人間に佛性のあることは能く承知して居り
ますが犬の如き畜類にも、佛に成る正因は有るものですか』と問うたのである、
すると趙州は有るとも無いとも、何共謂はず、只『無』と答へた、此無というたの
は何ういふ意味かと云ふのである、若し夫れ此れを無と云うたからとて、只『ナ
シ』といふ意味に解したら薩張り成つて居らぬ、爾うなると何の事か譯が分らな
く成る。

隻手音聲

それから又白隠の隻手といふのは、隻手音聲というて、分り易く云へば『鳴ら
ぬ片手の聲を聞け』と云ふのだ、これは白隠が自ら作つて、百練千鍛、爐鞴裡に
大勢の雲水を苦めた所の名高い則である。これも鳴る處の隻手の聲ならば、それ
は誰れでも聞くが、鳴らない隻手の聲といふと、チヨットやソツトの苦勞では聞

かれない。

柏樹子

も一つ例を擧げて見る。

趙州因僧問、如何是祖師西來意、州云庭前柏樹子

或時趙州和尚の處へ一人の雲水が来て、如何なる歟祖師西來意と問うた、即ち達
磨大師が遙々印度の國から、この支那へ御越しに成つたが、あれは何ういふ意味
であるといふ義、更に言葉を換へて云へば『如何なるか佛法的々の大意』といふ
も同じ事である。斯る意味の問答を趙州和尚に對して試みると、趙州は『それは
何も七六づかしい事はない、庭先の柏の樹、堅い／＼柏の木が居然佇立して居
る、それが即西來意だぞよ』と答へられた。これも何の事か薩張見當が附かぬ。

公案とは一體が恚ういふ風に奇々妙々な、到底常識では判断の附かないもの許
りである。故に世間の人は此不合理な常識の沙汰では及びも附かぬ問答を視て、
兎角の誤解を生ずるのであるが、併し此の一見茫漠たる問答中には、實に千古不

大哲理

公案の内容

禪とは何ぞ
磨の大哲理が含蓄されてゐる。

教外別傳不立文字

衲は是に於て教外別傳の意味を解釋して置く。禪宗の金看板は教外別傳不立文字である。此の教外別傳といふ事は如何なる意味かといふに、嚮にも縷々公案の實例を示して説明せし如く、どの公案として、常識をもつて判断の附くものはない、判断が附かないから、全然不合理にして殆ど取るに足りないもの歟と云ふに、決して然らず、一見不合理に見えてもその裡には、甚深微妙の大真理が含まれて居る、其處が即ち教外別傳である。教外別傳といふ事は教の外別傳といふことで、教を立て、教へ導く事の出来ない教といふ意味に外ならぬ。不立文字といふのも其通り、文字や理窟や議論では到底言ひ現すことの出来ないもので、文字以外、議論以外に、何にか知ら、捕捉する一物がある、その一物は文字や教では傳へる

ことが出来ないといふのが教外別傳不立文字の意味であつて、教外別傳といふのも、不立文字といふのも、畢竟同一の意味である。この文字以外教以外に、存する所の或る一物は、如何にして人に傳へ、如何にして人に諭すかと云へば、それは一器の水を一器に移すやうに、心を以て心に傳へるより外に仕方のないものと云ふので、又以心傳心と云ふ熟字も出来て居る。以心傳心といふと、何か六づかしい事のやうに思ふ人があるかも知れないが、何もそんな譯ではない、世間の人も平素に平氣で使つて居る、諺に『眼で知らず』といふ事がある、眼で知らずといふ事は、即ち以心傳心である。要之此の教外別傳不立文字といふ二句八字、及び以心傳心といふ四字位、禪を説明するに於て、最も簡單にして又尤も明瞭なるものはない。此看板程事理明白な看板を書いた達磨大師は今頃の賣藥の廣告にも、化粧品の廣告にも見當らぬ。達磨大師が今時居ればさし詰めクラブ沈粉か、仁丹から高給で雇ひに來たかも知れぬ。呵々。

殺人劍活人刀

偕てモ一〇一度前に立ち戻つて公案の説明をして置く、前陳の無字や隻手の公案は、主として初心者の皮切りに用ふる公案であるかと云ふに、必ずしも然うとは極まつて居らぬ。禪なるものは、要するに人々の氣根に應じて授けるものであるから、學者には學者向き、軍人には軍人向き、百姓には百姓向きのものを授けて往く、故に耶蘇教の牧師であつたならば、直ぐゴツド(上帝)を以て公案とし、眞宗淨土の信者であつたならば、直ぐ阿彌陀如來を以て公案とする、と云ふ工合に少しも定まつて居ない。人を視て法を説いてゆく所が、實に禪宗の禪宗たる所以で、こゝが禪宗の所謂殺人劍活人刀と云ふ可き所である。

それは爾うとして、今南無阿彌陀佛の六字の名號を以て、公案とするとせば、如何にして公案とするやと云ふに、阿彌陀如來に相見して來い、若くは阿彌陀如

來に成つて來い、と云つて工夫さす、ゴツドを公案にするのも亦然りである。世間の人は、阿彌陀如來と云へば、死後十萬億土に往つて、初めてお目通りの許されるものであると、思つて居られるやうであるが、我禪宗の宗意安心は、即心即佛、娑婆即寂光淨土であるから、死後杯と氣の長いチヨロ臭い事は謂はない、現在生きて居る、此の活動の世界に於て、自分自身が阿彌陀如來にも成り、勢至にも成り、觀音にも成り、不動にも成り、佛界にも入り、魔界にも通じ、天にも上り、地にも潜る底の者でなければならぬ。さうあつてこそ、眞の活如來活佛である、然らばその活佛となるには、如何したならば宜ろしい歟。此處が大に工夫のある所である。

幸ひ話が阿彌陀如來の續きであるから、次章に於て古來有名なる一二の逸話を紹介して置く、最も次ぎの話が前の話と、互に照應して諸君の參考と成るや否やは、衲の知る限りではないが、如何にも面白いと思ふから、茲に記載して見る。

禪とは何ぞ
是れで多少でも阿彌陀如來の光明に攝取せらるゝ事が出来れば、其は望外の幸である。

一遍上人——淨業者

時宗の開山、圓照大師智眞一遍上人は、元と紀州由良の興國寺法燈國師に參禪して居られた。故に上人は純他力門の開祖であるが、亦能く禪の蘊奥に徹底して居た大徳である。國師が『念起即覺』の話を舉せられた時、上人は一首の歌を詠んで呈せられた、その歌に、

唱ふれば我も佛もなかりけり

只南無阿彌陀佛の聲のみぞして

國師は此の歌を見て、マダ未徹底ぢやと謂はれたから、上人は更に一段の工夫を費やし、改めて、

唱ふれば我も佛もなかりけり

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

として、呈せられしに、國師は其處々々と手を拍つて喜び、遂に手巾印籠を附屬して、印可の證とせられたと云ふ事である。此話は我禪宗で云ふ許りでなく、時宗の宗内にも傳へられて居る話である。

又次ぎの如き、キビくした話もある。

今は昔、白隱和尚の時代に、駿河國に一人の淨業家があつた、淨業家と云ふのは、一意専心、念佛三昧に入つて、明けても暮れても稱名念佛を唱へ、念佛の一行を以て極樂往生を希ふ者の謂ひである。此の淨業家は斯くして、來る日も來る日も念佛三昧に入り、念佛の外眞に餘念無かつた所、何時の間にか、心華自然に開けて、所謂彌陀なるものに相見を仕て仕舞つた。が、此人固より參禪入室して、師家の鉗錘の下に開悟したのではないから、何人かに見解を呈して證明を請

はなければ、どうも安心の出来ない所がある、乃で檀那寺の和尚に就て相談に及んで見た所が、和尚何の事か、薩張り分らない、分らないが、好い事を教へて呉れた、と云ふのは、『私には解らないが、原宿に白隠と云ふ遣手の和尚が居るから其處へ往つて訊ねて見たら』と云ふ事であつたから、早速白隠を訪づれた、白隠は一見して此奴只の鼠でないかと見て取つたが、併し白隠は極めて平凡な質問を發して試に氣を引いて見た。何ういふ質問を發した歟と云ふに『お前は本年何歳に成る歟』と問うた、すると淨業者は『某甲彌陀と同年』と答へた、白隠驚かさず『彌陀本年何歳歟』と押返すと、『某甲と同年』と答へて、意外にも却々の手答へがある。白隠は間髪を容れず、『其彌陀即今何處にか在る?』と、再び一揖を與へたら、淨業者は黙してニユツト右手を突き出した、乃で白隠益々堪らず、追ッ掛け引ッ掛け難問を浴せ掛けしに、一々應酬して立所に數十則の公案を透過したと云ふ事である。この話は我禪門では、何人でも三昧に入れば、好しや悟道の何

物たるかを知らない者でも機縁自然に純熟して、何時しか因地一聲破顔微笑する時期があると云ふ例に引く所の話である。禪に志す人の爲に、參考として話すには極めて面白い話であるが、併しこれを聞いたからとて、猿の人眞似を遣つたらそれこそ罪科彌天である。

是の如く、我禪門で云ふ所の阿彌陀如來は、西方十萬億土抔と、遠い遠方の阿彌陀如來を云ふのでなくて、即今自己が眉毛上にある阿彌陀如來を云ふのである。偕てその阿彌陀如來は、如何なる如來か佛か、請ふ我禪門に来る獅子兒、工夫一番せよ。

直指人心見性成佛

次には直指人心見性成佛と云ふ事に就て、少し許り書いて見る。

直指人心見性成佛、これも禪宗の金看板で、禪宗の宗意は此の八字に盡きて居

直指人心見性成佛

禪とは何ぞ
る、故に禪を解説するには、見通しのならぬ句であるが、偕て直に人心を指して
見性成佛とは、一體如何なる意味かと云ふに、『本來の面目坊を見よ、然かすれば成佛が出来る』と、只この意味に外ならぬと思ふ。臨濟和尚も左の如く申され
た。

赤肉團上に一無位の真人あり、常に汝等の面門より出入す、未だ證據せざる者は看よく。

と、赤肉團上とは吾人の肉身である。肉身の内には一無位の真人と稱する者があつて、恒に吾人の四支五官(面門)より出入して居る、故に未だ其の真人を見届
けぬ者(證據せざる者)は、看よくと云ふのである。吾人が肉身の内にな一無位の真人が有つて、現在既に入居る證據には、吾々は眼で視、耳で聞き、鼻
で嗅ぎ、口で談論し、手で執捉し、足で運奔して居る。此の真人は眼耳鼻舌身意
と六個に分れて、其作用も素より同一ではないが、然し『本是一精明、分爲六和

合、一心既無隨所解脫』であるから、その真人を見附け出して、銘々の所有物に
せよ、所有物にした所に於て、解脫が得られると云ふのである、が併しその一無
位の真人は、容易に手に入るものでない。容易に手に入らねばこそ、雲水は皆な
血の涙で修行するのである。孰れ後らに至つて、雲水の苦勞談もする積であるが
次には見性と云ふことに就て一言して見る。

見性とは何ぞ

見性とは何ういふ事を云ふのかと云ふに、見性とは最初の一關に於て、初めに
授かつた所の公案を透過したら、其時を見性した若くは入省したと云ふのであ
る。既に見性すれば、その人は門外の人でなくして、門内の人であるから、前者
を未透底、後者を已透底の人と云ふ。

既に已透底の人と成つて、第一關門を通過した後には、又如何なる公案を授か

見性とは何ぞ

禪とは何ぞ

るかと思ふに、吾々が學校に於て數學を研究しても、數學には應用問題があるやうに、又公案にも夫れ々の活用問題がある。例之は隻手の音聲は聞いたが、マダ富士山絶頂の隻手音聲は聞かないといふ場合には、その絶頂の音聲は如何、と云ふが如きが、即ち活用問題である、その活用問題を一通り見て仕舞つたら、次には法身、機關、言詮と各其機根に應じて、色々奇抜な公案を授ける、一つ二つ實例を示せば

此庭敷に居て坐つた儘で、向ふを走る汽車を止めて見よとか、或は

瓢から駒を出して見よ

とか、又は

手尺井中人、不假三寸繩、如何救得此人

伊勢の海千尋の底の一つ貝

袖ぬらさず取るよしもがな

と云ふが如き、

お前は石の唐櫃に入れられて外から錠前を降ろされたら何うする。

などと途方もない面白い問題に接觸して、一々捌きを附けてゆくのであるから一たび禪に指を染めて、ソロ／＼興味を感じて來ると、もう面白くて／＼堪らな

いやうになる、が同時に鼻息が段々荒く成つて、遂に鼻孔遼天のお天狗に成つて仕舞ふ、と云ふのも、お悟りを此位の程度に止めて置くからだ、先きの如き公案

はマダ悟道の初歩であつて、此の後ち幾百の公案、幾千の難關があるのである。故に禪に志す者は、何處までも階子禪だと承知して、倦まず撓まず、飽まで向上

の一路を辿らねばならぬ。

上述の公案が凡て雲を攫むやうな、空々漠々、幾んど捕風捉影の觀がある所から、多くの人は毛嫌ひを爲し、又は種々なる惡罵を仕掛けるのであるが、併し如何様に邪推し、如何様に惡評を試むるも、禪では瓢箪から駒も出で、富士山も出

見性とは何ぞ

禪とは何ぞ
で、伊勢の海の貝も見事に袖濡らさず取る事が出来るから、不思議である。此處が實に禪の妙機妙用の存する所にして又釋尊以來、今に傳へて遂に衰へざる所以である。

大疑の下に大悟あり

上來の敘述に依りて、禪の何物たるか、略ぼ了解せられたであらうから、次には第一關門を透過するに、幾何の努力を要するかと云ふ事に就て、一言して見るこれも衲が前述せし如く、人々の機根に利鈍の差があり、骨折りにも精粗の別があるから、決して一様には論じられぬ。白隠に相見した淨業者の如くに、全く悟道の何物たるかを知らずして、而も能く悟入したのもあれば、人の一年掛つた公案を僅か一週間で遣つて除ける人もあるので、一つは因縁もあり、直ちにこれで以て努力の程度を言明することは出来ないが、併し第一關門を透過する皮切り

には随分の苦勞を要する。衲が曩に血の涙、と云つて置いたが、實際血の涙で購ふにあらざるよりは、最初の關門を潜ることは出来ない。雲水の中で見性する者は、多くは平生に非ずして、臘八か他の大接心中が多いのを見ても知れる。僧堂は一年内を雨安居、雪安居の二夏に分ち、前者を夏夏と稱し、後者を冬夏と稱す、一夏は九十日にして此間を制中と云ひ、この外を制間と云つて居る。一夏の中には入制、半夏夏末の三度一週間の大接心がある。而して冬夏には此外に臘八大接心が又一週間ある。故に冬夏丈は都合四回の大接心がある譯であるが、他の大接心の事は姑く措くとして、臘八接心の有様を述べて見ると、丸で死物狂ひである。此の臘八の起原は何から起つたかと云へば、其由来は釋尊の正覺成就の時に基いて居る。釋尊が雪山に於て端坐六年の工夫をして、其結果、「嗚呼奇哉一切衆生皆具三有如來智慧德相」と仰せられて、正覺を成就せられたのは、十二月八日の黎明であつた。乃でその因縁に基いて、十二月の一日より同八日

大疑の下に大悟あり

禪とは何ぞ
天の坐まで、満一週間大接心を行ふ事に成つたのが、抑も此の臘八大接心で、臘は臘月、八は八日の意味である。

此の一週間の大接心は、寝る時間が夜の十二時から、午前の二時迄で、僅に二時間しかなく、その外は坐禪と入室の仕通しである。殊に入室は一晝夜に何十遍と云つてしなければならぬ、けれども人間の知識に程度のある以上、一つの問題でさうく言つてゆく事のあるものでない、で遂には工夫してもく、最早何事も言つてゆく事の出来ぬ無一物の境涯に到つて仕舞ふ。此の無一物の境涯に到つた處を、古語には鼠入ニ錢筒ニ伎既窮と云うてあるが、此の伎の既に窮した境涯、即ち平素の學問も智見も皆な悉く取り上げられて仕舞つて、二進も三進もならない所まで到達せなければ、一陽來復の芽はふかないのであるから、禪堂では此の窮地に陥擠しよう／＼とし掛くるのである。

直日（先達）が出て来て、貴様入室しないかと迫まる、幾ら迫られても、佛の

顔も三度、散々ッ原入室して和尚（師家）より怒鳴られた揚句の果であるから、如何に引張られ、如何に窮迫されても、入室許りは出来ませぬ、と云ふ面持ちで應へずに居ると、直日はソロ／＼警策を以てコジリ出す、コジ出されても遮二無二疊に嚙り付き、柱に引ツ攪まつて動かずに居れば、それを又愈々引ツ立てる、と云ふ有様で、丸で戰爭宜しくである。僧堂は法戰場裡であるから、内には煩惱妄想と戦ひ、外には師家と戦ひ、直日侍者と戦つて、ト、の詰まり進退維れ谷まり、絶體絶命の境涯に到達しなければ、鼠は飛び出さないのであるから泣いても笑つても、一度は此の窮地に落在しなければならぬ、此の窮地に落在して、疑ひ去り疑ひ来る、即ち大疑の下には大悟ありであるから、充分に疑つて充分に骨折ると云ふ事が必要である。

禪は宗教か

禪は宗教か

禪は果して宗教なりや、如何。衲は此の問題に就て少許り述べて置きたいのである。世間の人は禪を以て純宗教のやうに考へて居るやうである、尤も現今の禪は、宗教的色彩を帯び、且つその護持者は僧侶であるから、然かく思惟されるのも無理からぬ事ではあるが、併し禪その物の本質に就て論ずれば、必ずしも宗教とは云へなからうと思ふ。衲は某宗教學者：：名前は秘す：：が禪を以て宗教の内に數へ、宗教には儀式がある、科學や哲學には儀式が無い、禪の儀式は禪定ちやと云はれた事を記憶して居るが、禪定を以て禪の儀式と思はれては恐入る。禪定は儀式ではない、禪定は禪を修するに就て自然に得る處の一種の力である、然るに之を單に儀式と見られては困まる、と云ふのも、禪その物を以て、純宗教と見做すからである。最も禪が宗教的色彩を帯びて顯はるれば、一大宗教とも成り、哲學の形式を取つて顯はるれば、一大哲學ともなり、學問の方法を以つて顯はるれば、一大學問とも成るのであつて、必ずしも純宗教とは云へなからうと信ず

る、然らば畢竟如何と云ふに、禪は宇宙を達觀する所の哲學、即ちお悟りである。と云ふ方が、最も當を得るに近い云ひ方ではあるまい歟。既に宇宙を達觀する哲學即ちお悟りである以上、科學が如何に進み、哲學の玄理が如何に向の上しても、それが爲に何等の影響を受く可きものでない。禪の眞理は千古萬古に互つて、動かざるものである。

現今は諸種の學術が進歩發達して、宗教の教理上にも幾多の影響を及ぼして居る。現に淨土門の信者中には幾多の異安心者を出すと云ふが如きは、即ち這般の消息を齎らすものに外ならぬ、聞説らく、同門に於ける宗教大學生等は決して舊時の信仰に甘んじて居らぬと。彼等が舊時の信仰に安せざるは、彼等が哲學を修め科學を學得した結果として、舊時の信仰の彼等を満足せしめざるが爲である。其の段になると、我禪は太平無事、時代思潮の影響を受けて、基礎の動搖すると云ふやうな心配はない。此處が亦禪の眞理の絶對的なる所以である。

悟後の修行

次には悟後の修行の事に就て一言して見る。禪門の公案の数は一千七百則あるが、斯の一千七百則の公案を一通り見て仕舞うたならば、それで禪の修行は終りを告げたのであるかと云ふに、決して然らず、悟りを開いたからとて、その悟りが真個手に入つて居るものでない、悟りと云ふものは悟つた許りでは何の益にも立たぬもので、悟つた理窟が日常の行爲と合一して行かねばならぬ。がそれを合一してゆく事が容易に出来ないから、仍で悟後の修行が必要と云ふ事に成る。悟後の修行とは、悟後信後の修行であつて悟つた上悟つた後ちの修行といふ意味である。此悟後の修行を一寸譬を以て云うて見ると、飯で云へば、むらす時代である飯は炊いたばかりでは可かぬ、炊いてむらさなくては本當の御飯に成らないやうに、悟りもその如く、熟らさなくてはならぬ、が、此熟らすといふ事が又容易な

事でない。先づその一例を示して見よう。

禪宗の語に「隨所爲主、立所皆眞」といふ句がある。讀んで見ると意味は直に解るけれども、これを實地に働かすといふ段になると、是れ却々の難事である。人間と云ふ動物は、兎角事物に著いて廻る奴で、火に遭うては火、水に逢うては水に使はれこそすれ、それを我物にして使つてゆくと云ふ事は極めて難い、が幾ら火でも水でも鬼でも隨所に主となる、即ち佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺してゆく、活手腕が無ければならぬ。爰に面白い話がある、さる所に大洪水があつて、濁浪滔々、一面の大海原と化して酸鼻の極を盡した時、或る一人の居士が、洪水地に一人の禪師を訪づれ、「此の大洪水で嘸かしてお困まりでせう」と、見舞の辭を述べると禪師は呵々と打ち笑つて、「お、御見舞は有難う、だが此の洪水が悉く熱湯であつたら、柄も大に閉口するぢやが、併し幸に水であるから、安心ぢや〜」と云つて、けろりとして居られたと云ふ事だ。もう一つ名高い話が

ある。禪とは何ぞ

甲州慧林寺の中興快川國師と云ふ方は、織田信長の爲に寺を圍まれて、山門上に於て火定に入られた人であるが、此の人が煙焔天に漲る大紅蓮中に在つて……勿論其の時は國師一人でなく、衆僧と共に山門に於て何かの供養を仕て居られる處を、不意討ちしたのであるが、其時國師は如何せられたかと云ふとハヤ火が法衣の袖に移らうともして居るに拘はらず、衆僧に向つて『汝等末期の一句を道將し來れ』と逼られた、けれども、之れに應ずる者が無かつた爲め、『我汝等に代つて一轉語を下さん』と云つて、彼の有名なる『安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら涼し』といふ句を吐いて、神色自若として火定に入られたと云ふ事である。これは名高い話で、皆な人の知る所である、即ちお悟りも此處まで到らねば本物ではない、先きの洪水の話と云ひ、後の國師の話と云ひ、水に入つては水を使ひ得、火に入つては火を使ひ得た、活例證ではあるまい歟。

古人は此の悟後の修行に就て、幾多の苦行を積み、幾多の活工夫をして御座る即ち大燈國師は五條橋下に於て、二十年乞食の群れに入つて聖胎長養せられ、無相大師は美濃の國は伊深の山里に於て、十年牧牛の生活に入らせられた。大燈國師が一日案上に鑰鎖の放在しあるを視て、豁然省悟されしは、廿六歳の時である。此の血湧き肉躍る壯年時代に一切事を放下著して、其の姿も憐れなる一乞丐僧と化して、道の爲めに孤往獨邁された、國師の心中は果して如何であつたであらう歟。又無相大師が大燈の印可を受けられしは五十三歳の御時である、斯の時既に明眼の大宗匠であつたが、而も飄々乎として伊吹の山村水郭に隠れられたは、何の爲である歟、是れ他無し、皆な悟後信悟の修行を爲さんが爲である、然かれば悟後の修行の如何に難きか、又悟前の修行より悟後の修行の如何に大切であるかも、これに徴して解ることであらう。

禪の效用

最後に禪は修す可きか否か、禪坊主の禪を修す可きは、勿論であるが、禪坊主ならざる在家の人は如何であるといふ事に就て聊か衲の所見を披瀝して置きたいのである。

徹頭徹尾禪に志が無く、又禪を修する餘暇のない人は、是れ已むを得ないが多少にても禪を修して見ようと云ふ人であつたならば、その人に對しては、衲はお勧めする一人である。爰に慙ういふ面白い歌がある、白隠和尚が隻手の聲隻手の聲と八釜しく云つて人に勧められるから、或人がそれを嘲つて、

白隠の隻手の聲を聞くよりも

兩手を打つて商賣をせむ

と云つたら、白隠は直に、

商賣が兩手を打つて成るならば

隻手の聲は聞くに及ばず

と、一矢酬はれた。全く爾うである。吾々が順潮に棹して、只何事もスラ〜と切り抜けて往けるのであつたならば、何も禪を修する必要もなければ、宗教を信する事も要らないのである、が併し人間一生の中には、如何なる事變が起きぬとも限らぬ、例之ば吾々が航海して、イザ難船するといふ場合に、吾人平生の知見平生の學問、平生の覺悟が、直に發動してその場合の役に立つであらう歟。之れは極端な場合であるとは云へ、併しこれに類する事は、人間一生の中に屢々ある例へば商業上非常な失敗をしたとか、或は頼りに仕て居た者に死別したとか、但しは目論見が外づれて、二進も三進も出来ないとか云ふ場合、さう云ふ場合に平素修得した學問や、平生の考へが間に合ふであらう歟。恐くは間に合ふまいと信する。然ればその時に役立ち、其時に光りを放つものは禪の修行であるから、

禪とは何ぞ

納は遣つて見ようと云ふ人であつたならば、是非に慙慙したのである。

而已ならず、禪は諸道の根本である。何故諸道の根本であるかと云へば、釋尊が申された、三界は唯一心であると。如何にもその通りである。吾々が碁を打つその碁は手が打つと思ふ歟、決して然らず、皆な心の所爲である。繪を畫く、これも手が書くと思つたら大間違ひ、皆な心が書く、その證據には心の氣高い人が畫けば、氣高い繪が出来、卑しい人が書けば卑しい繪が出来。畫人に最も必要なるは人格であると云ふのも、蓋し此の理に他ならぬ。百姓にしてもが其の通り精神の奇麗な人が作つて居る畑は、何時もかも奇麗である、心の締まりのある人が耕作して居る田地は、耕作上にも締まりがある。是の如く三界は皆唯一心であるが、然らばその一心を訓練し、その一心を自由自在に使ひこなすものは、何んであるかと云へば、禪である。禪の修行をすれば、従つて心の使ひこなしが利く、であるから、昔から達人と云はれ、名人と稱へられた人は、大抵皆な禪の修養を

積んで居る、今武人の方は、一切抜きにしても、茶の湯の宗匠千利休も禪に關係があれば、狩野家の元祖古法眼元信も禪に關係がある、その他探幽、雪舟、兆殿司、啓書記、圓山應舉、劔道界の巨人柳生但馬守宗矩等、一々枚舉に違あらずである。利休は大徳に於て禪を修し、古法眼は妙心の本光國師に就き探幽も妙心にて修し、雪舟、兆殿司、啓書記等は皆な禪僧である。又應舉は白隠下四天王の隨一斯經和尚に就き、但馬守は澤菴と深い關係がある。是等の俊才が一世に名聲を博したるは、決して偶然ではない。

まだ、禪がどんなものかは判つたであらうとも思はれぬが餘り長くなるから一先づ擱筆する。

禪と武士道

一 緒言

日露戦争後、武士道の研究が餘程盛んに成り、その研究の結果は、新聞雜誌に或は書籍に、發表せられて居るが、その多くは武士道は儒教の感化であると云ふ意味のものが多く、従つて世間の人も然かく信じて居るやうであるが、顧ふに此は一種粗雑なる觀察ではあるまい歟。元來武士道なるものは、一派の學說でもなければ、又一門の宗教でもない。畢竟するに我國の歴史上に於ける、一大事實である。抑々儒教が儒教と名の附く程のものに成つたのは、何時頃からであると云へば、徳川時代に入つてからである。それ以來の儒教は皆な五山禪僧の専有物であつて、一面儒者であり、一面僧侶であつた所の五山の禪僧が、足利時代の末期

より儒教の書物を研究して、その研究したものを徳川時代に引續いて、乃で儒教と云ふ程のものに成つたのであつて、徳川氏以前には儒教と云ふ程のものはない。然るに武士道は何時頃から起つたかと云へば、言ふまでもなく、武士が武士としてその勢力を社會に占むるに至つた時、即ち頼朝が覇府を鎌倉に開いた時から、既に武士の思想中に胚胎して居た一大思想である。即ち儒教以前に既に發芽して居たものである、であるから往時の武士は皆佛敎の感化を受け、僧侶の指導を仰いだものであつて、決して敎へを儒門に請うたものではない、故に佛敎と武士道、佛敎と武人、是れには密接なる關係がある。その内にも禪の感化を受けて居る事は、夥しい事實であるから、少しく禪と武士との關係を述べて見よう。

二 禪と武士

禪と武士との關係を述べるに就て、詳細を極めようとするれば、それは限りのない

話であるのみならず、又然うする必要もないから、茲には只著名なる人々のみに就て云はう。

北條時宗

佛光禪師

北條時宗は日本武士の典型とも稱せられて、實に一世の偉人であるが、此の偉人と禪との關係はどうであるか。彼れの師事した人は、鎌倉圓覺寺の開山佛光禪師である。——禪師諱は祖元、字は子元、又自ら無學と號し弘安九年六十一歳にて寂す——彼れは禪師を支那より招聘する爲めに、態々二人の僧を派遣してゐる。今同寺に禪師を招聘するに用ゐた當時の請帖が襲藏されてゐる。此の請帖は佛光錄にも出て居る。

時宗留意宗乘、積有二年序、建營梵園、安止緇流、但時宗每憶、樹有根、水有源、是以欲請宋朝名勝、助行此道、上煩詮英二兄、莫憚鯨波

請狀

險阻、誘引俊傑禪伯、歸來本國、爲望而已、不宣

弘安元年戊寅十二月二十三日

時宗和南

詮藏主禪師

英典座禪師

時宗の修禪

此の古文書は時宗自筆の儘遺つて居て、今日では國寶に編入されて居ると云ふ事だ、然れば之を見ても、時宗が如何に求道の念に篤かつたかゞ解る。梵園とあるは建長寺の事で、建長寺を建て、日夜佛法修行を仕て居るが、併し樹には根幹があり、河流には源泉がある如く、佛敎にも本家本元がある、佛敎の本家本元は支那であるから、支那の高僧碩徳を招聘して、佛道修行に意を用ゐたいとの意である、而して此の請ひに應じて渡來されたのが、佛光祖元禪師其人で、禪師が日本へ渡來されたのは、弘安二年の秋で、五十四歳の時である、禪師は其年の八月二十一日建長寺へ入院された。

北條時宗

禪と武士道

時宗に就て一つの逸話がある、此の逸話を見る時は、彼れが宗門上の見地も、自ら了解が出来、その逸話に曰く、

相模守北條時宗は、鎌倉の執權として二たび蒙古の使者を斬り、遂に二十餘萬と稱する國敵を、筑紫の海戰に於て鏖殺したる猛將軍なり、曾て人を宋國に遣はして、無學祖元禪師を請聘し、圓覺寺を建て、師とし事ふ。故に弘安四年蒙古侵襲の國難おこるや、直に軍裝して、禪師に見えて曰く、大事到來せりと禪師曰く、如何か向前せん、時宗身を躍らして、大喝一聲す、禪師いはく、眞の獅子兒なり能く獅子吼す、驀直に進前して回顧すること勿れと、時宗拜謝して出づ。

時宗が蒙古二十萬の軍兵を、筑紫の近海に引受けて、見事にも一撃の下に粉碎したる手腕は、勿論彼の資性が自然に然からしめた所もあつたではあらうが、併し禪師の面前に於て大獅子吼する力量がなくては斯る藝當は打てない。

足利尊氏——楠正成

楠正成
明極禪師

足利尊氏は夢窓國師に師事して居る、嵯峨の天龍寺や、洛北等持院は尊氏が、後醍醐天皇の菩提を弔ふ爲に、國師の勧めに由つて建立した寺で、國師と尊氏との關係は皆な人の知る所である。楠正成は如何であるかと云ふに、是れ又熱烈なる禪の信者であつた、彼れが建武三年五月、後醍醐天皇の綸旨を奉じて、攝州湊川に出陣し、高巖寺山下に陣を張つた時、同寺に入り、寺主明極禪師に見えて必要を問うたことが傳へられて居る、今當時の状況を記した記事に曰く、

楠正成朝臣は、建武三年五月、後醍醐天皇の綸命を奉じて、攝州湊川に出陣し、高巖寺の山下に營を張る(中略)二十四日、正成高巖寺に入り、寺主明極楚俊禪師に見えて問うて曰く、生死交謝の時如何、禪師曰く兩頭俱截斷、一劍倚天寒と、正成曰く、畢竟如何、禪師威を振つて喝一喝す、正成通身に汗流れ、

足利尊氏——楠正成

禪と武士道

起つて三拜す、禪師曰く、公すでに徹底せり、正成いはく、若し來りて和尚に見えずんば、安んぞ向上の關捩を超出することを得ん、今より世々針芥を失はざらんと、禪師曰く、公の問對甚だ舊參の者に下らず、曾て他の宗匠に見え來れることありや、正成曰く、昔し南都に赴く途中に於て、一僧に逢ひ因みに疑ふ所を質せり、僧いはく、公の名は何といふや、予いはく正成、時に僧正成と呼ぶ、予應諾す、僧曰く是れ何物ぞ、予こゝに於て心中豁然、これより後常に其僧を請し、屢々教を受く、然るに其僧幾ばくもなくして寂す、予其道を問ふこと僅に八ヶ月、然れども稍々斯道を會得してより以來、兵を用ふること自在機に對して無礙なることを得たり、と。禪師いはく善哉多年作家の爐鞴に入り來らずんば、争でか今日あることを得む、正成拜謝して佛殿に入り、佛を禮して去る。

正成の參禪

右の記事中に一僧とあるは妙心寺開山關山和尚(無相大師)の事である、延寶傳

す 聲 一 鳴 大 宗 師



燈錄」の著者師變禪師は、同書第二十一卷、妙心寺開山惠玄傳の末尾に左の一節を附記して居られる。

余(師變)在江府、閱兵家者流之一書、曰關山和尚在大徳一日、遊履南都一途次、與楠正成一偶會立談、正成邀請私第、款待七日、仔細參禪、又看思地卷、正成屯攝之湊川一時、寄于家臣恩地一書中、有言正行長成請紫野僧、令參禪法云云

併し乍ら、茲に注意をして置かねばならぬ事は、或る一部の學者は、正成參禪の事實を否認して居る、けれども、正成對明極禪師、正成對關山和尚の事實は、既に古い所の書籍にも見え、又現に神戸の廣嚴寺は現に楠寺と謂はれて居るが何よりの證據である、故に濫りに否定すべきものではなからうと信ずる。

織田信長

由來信長は日蓮宗の信者であつたと云はれて居るが、日蓮宗と云ふよりも、寧ろ禪宗の信者であつたと云ふ方が、どうやら確實らしい、最も彼れが參禪の有無は、今日之れを知ることが出来ないが、併し少くとも禪宗と關係のあつた事は、争はれぬ事實がある、信長が幼時放縱度なきを愛へ、之れを苦諫して自殺した平手政秀の菩提を弔ふ爲に、其名を採つて政秀寺と云ふ寺を建立した事は、隠れもなき事實で、その政秀寺は今現に名古屋の矢場町に在つて、妙心寺派の末寺に屬して居る、而已ならず、辻善之助氏(文學博士)の説に據ると、此寺の開山は澤彦和尚(澤彦名は宗恩、妙心寺に住すること、前後五回、天正十五年十月に寂す)と云ふ人で、此澤彦和尚は信長と云ふ名も選み、また信長が岐阜城を築いた時、岐と阜との二字を選んで地名としたのも、又信長の爲に「天下布武」の印章の文句を選んだのも、皆此の澤彦和尚で、それから信長が江州の安土に城を築いた時、天龍寺の僧策彦をして、その記を書かしめようとした時、策彦自らは之れを

澤彦和尚

僧策彦

南化國師
安土山記

辭し、爲めに妙心寺の南化和尚を薦めたのも、此の和尚であると謂はれてある、南化は命を奉じてその記を草した、之れが有名なる安土山記で此記は南化録にも出て居る實に古今稀有の美文である。

秀吉—家康

それから秀吉は如何であるかと云へば、是れ又禪と密接の關係がある、現今妙心寺山内隣花院に大本全部七卷より成る「虛堂錄」の寫本(竪一尺七寸、横一尺二寸)がある、これはどうした本かと云ふに、前記の南化國師が豊臣の請に依つて大阪城中に於て提唱された講本と云ふ事である。

して見れば秀吉も亦多少禪に參じ、禪の素養が有つたと云はれぬでもない、而已ならず、彼れが五山の僧と關係の有つた事は隠れもなき事實である。彼れが京都大佛前に、耳塚——此の耳塚は彼れが征韓の役に敵の鼻を刺り來つて、开を埋

耳塚

秀吉—家康

禪と武士道
 葬した塚で、初め鼻塚と稱せしを後ち耳塚と改稱した——を築いて、その大供養を執行した時には、五山の清衆四百餘員を請じて大法會を修して居る。此時の導師は相國寺の兌長老で、長老が卒塔婆の銘まで書いて居られる、殊に又彼れは信長公の葬式を大徳寺に於て執行し、其子棄君は妙心寺に葬つて居る。憊ういふ所から察しても、彼れが禪の歸依者であつた事は最早や否み難い事實である。次に家康は如何と見るに、家康には南禪寺金地院の僧崇傳が就て居る、最も崇傳は家康が政治上の顧問であつたとは云へ、然し長老は當時に於ける禪門の大徳であつて、彼れの師事した人である事は、謂ふまでもない。

家光—宗矩

又三代將軍家光公、及び其臣柳生但馬守宗矩の二人は如何であるかと云ふに、此の二人者も東京品川東海寺の開山澤菴和尚に師事して居られる、一説には澤菴

和尚を家光公に推舉したのも宗矩であると云ふ事であるが、兎も角此の二人者も禪に關係のあつた事は、云ふまでもない事で、東海寺は家光公が特に澤菴和尚の爲に建立せられた寺院である、因に澤菴和尚と宗矩とに就ては、随分面白い逸話があるがこれは後章に譲る事とする。

大石良雄

更に降つて義士の大立物大石良雄に就て調べて見る。世間の學者は良雄は只山鹿素行、伊藤仁齋の門下とのみ思惟して、何等禪に關係のない人のやうに思つて居るやうであるが、焉んぞ知らん、彼れも亦禪の爐鞴裡に鍛鍊された人である。彼れの師事した人は赤穂龍門寺の開山盤珪禪師(大法正眼國師)である。今は既に故人となられたが、柄は嘗て刈谷無隱居士より左の如き談話を聴取した、今參考の爲に、少しく長くはなるが左に記載して見る。

大石良雄

禪と武士道

我國に仇討と云ふ仇討は、殆ど數へ切れぬ程澤山あるが、併しその内でも良雄の仇討ほど世に感動を與へたものは尠なからう、畏れ多くも勅語を賜はると云ふ仇討は、またとあるまい。是れには必ず何かの仔細があらうと、久しく疑問に仕て居た所へ、舊廣島藩士の湯川某が来て、良雄の復仇には實に恐れ入つた、我々凡夫風情の及ぶ所ではない、實に神か佛でなければ出来ぬ、先日舊藩主に面謁したら、其方は良雄が復仇の時、泉岳寺で讀み上げた祭文を、見た事があるかと尋ねられたから、まだ見ませぬと答へた、夫れでは見せてやらうが土藏から出すので時間が掛かる、暫く待つて居るが宜ろしいと申付けられ、靜かな一室に獨坐して、待ちながら思ふには、こゝが平生自己修養の度合を考へる好時機である、自己が良雄の境遇となり復仇したとして、其場合にどんな祭文を書くか、一番良雄と成つて此座敷で起稿して、夫れを實物と比較して見れば、人物の差は判然と分る、試に一番やつて見るべしと、冥想默考、祭文の起

稿に取掛り丁度出来た所へ、舊藩主に呼ばれ、良雄の祭文を讀み掛けて見た所が、自分が腹案の祭文とは天地雲泥の差で、丸で比較にはならない、第一あれ程に苦心慘澹であつたのに、其形跡は毫も云はない、第二に大野九郎兵衛の如き輩が有つたにも拘らず、一藩の上下男女老弱皆な一心協力とある、第三鮮血淋漓たる生首を携へ乍ら、昨夜上野介殿御宅へ推參 仕 則 御供申候と丈けで、仇を討つたことが少しも書いてない、第一第二は普通の忠とか義とかでは勿論考へられないが、忠義の精髓からでは随分考へられぬ事もない、けれども第三に至つては何とも考へが附かぬといふ話を聞き、愚老もどういふ譯かと、常に疑を抱いて居た、其後京都に来て宇治の神林某に懇意になつた所が、同家の祖先が良雄より貰ひ受けたと云ふ、良雄が手製の達磨の木像を見せられた、丈五寸位で良雄刻と銘が切つてある、手澤も十分に艶も光つて居る、愚老はそこで初めて、どういふ譯だか分らないが、良雄は達磨いちりをした哩と思つて

大石良雄

禪と武士道
居た、其後伊勢の津に居た時に、大徹禪師（南禪寺の前管長今は既に故人となられた）に久敷參禪して居た、永谷習吉に出逢つたら、先達鈴鹿郡坂下驛の舊家高家某が、良雄が播州龍門寺の盤珪禪師から、貰つたと云ふ硯を賣物に出した。餘り珍らしい品だから、金五十圓の價を附けたが、夫れでは賣られぬと云つて、東京の淺野家へ持參したが、多分同家で買ひ上げたであらう、其方が却て永世大丈夫でよい、そして其硯の裏面に良雄が、左の文を彫刻して居る。
予會參盤珪和尚、師曰本來不生、予不_レ會焉、今春聊有_レ識_ニ其趣_ヲ、直到_ニ和尚_一而舉焉、師曰是々、于_レ時見_ニ師之傍_一一之硯、師曰是則西行法師自作之硯也、予曰不然、西行未生以前良雄所作也、師微笑曰、出_ニ于爾_一者須_レ返_ニ爾焉_一、以贈_ニ予_一、予不_レ辭受歸矣

于時元祿六春二月日

大石某受用〇〇

愚老は此の硯の銘を見て、初めて良雄が盤珪禪師の爐鞴に參じた事を知り、前

述の第三の疑團は自ら氷解して仕舞つた、珍らしい事だから、知人森大狂氏に知らせて、禪學と云ふ雜誌に載せたり、多くの人々にも話したりしたので、遂には書物にも出る様に成つた。云云、
以上の事實は皆な我國に於ける重立ちたる人物に就てのみの例であるが、此の他の武人に就て右の如き實例を求むれば、到底枚舉に堪へない次第であらう。故に他の武人の例は、此處で打ち切つて次には禪と皇室との御關係に就て、述べることにする。

三 帝王と禪僧

帝王の中、何天皇が最も最初禪に御歸依に成つたかと云へば、龜山法皇である。これ以前、後嵯峨、後深草の二帝も、禪に御歸依に成つたと云ふ説もあるが、併し義堂の空華日工集に「本朝王者、歸_ニ禪宗_一、以_ニ龜山_一爲_ニ首唱_一」しある所より察

帝王と禪僧

禪と武士道

せば、先づ 龜山法皇を以て嚆矢としなければならぬ、法皇は何人を御歸依になつたかと云へば、南禪寺の大明國師(無關普門)と、同二世の南院國師(規菴祖圓)と此の二人である、南禪寺は、法皇が右二國師を御歸依の餘り、遂に離宮を改めて禪刹となし給うた。法皇修禪の道場である、法皇が二國師に參禪問法し給ひて、其御造詣の御深邃にあらせられた事は、最早や申すまでもなき事であるが、併し法皇が同寺へ御下げに成つた、御宸翰を拜讀して見ると、法皇の御信念が幾可許り、御深厚であつたかは、一目瞭然たるのであるから、左にその御宸翰を掲げて見る、因に禪林寺とあるは、南禪寺の事である。

禪林寺起願事

朕聞古云、人身難逢佛法難聽、吾被催三十善之餘薰、恭踐萬乘之帝祚、雖有亢龍之悔、猶待ニ金仙之樂、竊思何幸、法逢大乘、禪聞ニ南宗、處ニ於後五百世之間、如シ在ニ二百餘會之砌、爰以建寺度僧、有漏善根雖非本望、利生悲願化物要徑

也、吾子々孫々宜知ニ吾所思、當寺繁昌者、蘿圖永固、玉葉久茂、若背ニ吾所思、廢亡旋踵、若在ニ天界、以ニ天眼照之、若在ニ佛界、以ニ佛眼鑑之、思之々々、と宣ふに至つては、實に何共申様の無い、恐懼の至りである。「何幸、法逢大乘、禪聞ニ南宗」と仰せられた御言葉に於て、法皇が禪を修し給ひて、如何に法喜禪悦遊ばされた歟、と云ふ事が拜察されるのみならず、又「有漏善根雖非本望」と宣ひたる御一言の如き、是れ尋常一様の佛教信者の肚裏より出づる御言葉ではない、殊に又「吾子々孫々」以下の御文面の如きは、最も再讀三思すべき御言葉である、法皇が斯くまでに仰せらるゝは、内に深く何物かを御修得あらせられた結果である事は、何人も異論なき所であらう、此の御宸翰は今南禪寺の寶物として、襲藏されて居る。

次には花園法皇が、妙心寺の開山關山和尚(無相大師)に賜はつた御宸翰を示さう、此の御宸翰は妙心にて「往年之御宸翰」と稱し、此の御宸翰に頼りて妙心

帝王と禪僧

禪と武士道

一流の再興が出来、後ち五百載の今日までも、尚ほ續燐連芳の盛大を極むるに至つた最も大志なる御宸翰である。

往年在ニ先師大燈國師所、於此一段事得ニ休歇、特傳ニ持衣鉢ニ之後、報恩謝徳之思、興ニ隆佛法ニ之志、寤寐無レ忘、而心事依違、于今未レ遂ニ其願、頃年病痾纏牽、旦夕難レ期、空填ニ溝壑ニ者、永劫之恨、何事如レ之、仍一流再興并妙心寺造營以下事、申ニ置仙洞ニ之子細在レ之、縱過ニ一瞬ニ可レ滿ニ平生之志、門徒之中其仁不レ在レ它、廻ニ遠慮ニ可レ被レ果ニ興隆之願、故遣ニ鳥跡ニ述ニ著懷ニ者也

貞和二年七月廿二日

花 押

關山上人禪室

花圓法皇は御歴代中にも、最も博學聰明にあらせられた帝王であつて、漢籍として宋學の大家、佛書としては天台の教理にも、又眞言の密教にも御精通あらせられた御方である、その法皇が所有諸子百家の書を御究盡に相成り、最後に

禪門に歸し給ひ、以て右の如き御宸翰を賜ひたるのである。法皇は初め大徳寺の開山大燈國師に就かせられ、次に國師の上足なる關山和尚に就て、御修禪遊ばされた御方であつて、右の御宸翰中に、於此一段事得ニ休歇、特傳ニ持衣鉢ニ之後云云の御宸言に徴しても、禪の修行には、既に堂奥の人であらせられた事が拜察されるではないか。

後奈良天皇が妙心寺の大休和尚に宣下し給ひたる御宸翰には、左の如きものがある。和尚は妙心第六世雪江和尚の法嗣大寂常照禪師の上足で、妙心山内靈雲院の第二世である。

朕參禪年尙矣、祖師許多話頭古則、一々參究、一々證明舉ニ本有圓成話ニ而獲レ聞ニ未聞ニ焉、後一日在ニ別峰、直與ニ德雲比丘ニ相見了也、從前參得底、悟得底、一時瓦解氷消、洒々地、落落地、從レ是不レ受ニ佛祖瞞、受用確乎、得ニ大安樂、此恩甚深、何日報謝盡、縷々不宣、

帝王と禪僧

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

印

御幸の間

後陽成天皇

後奈良天皇が一天萬乗の君であらせられ乍ら、林樾の一微臣たる大休和尚に對し、「此恩甚深何日報謝盡」と仰せ給ひたるに至つては、叡感の程も亦拜察して餘りある、天皇は國師に參する爲め、時々御微行にて靈雲院へ御行幸に相成り、その都度入御あらせられたと云ふ、「御幸の間」は現今國寶に編入されて居る。

是の如き例を一々擧ぐれば、枚擧に堪へない次第であるが、併し最後にもう一つ後陽成天皇の御宸翰をお目に掛けよう。
朕迎ニ南化禪師入レ内、參ニ得即心即佛公案、全得ニ大機大用、不堪ニ叡感、生前雖可レ稱ニ國師、不レ遂ニ其志、故任ニ在日之旨、特賜ニ定慧圓明國師號、以報レ德酬レ恩、珍重

慶長十年乙巳五月廿日

無礙塔下

南化禪師

此の南化禪師と云ふのは、嚮にも云ひし、信長公の爲に安土山記を書いた人で妙心寺山内隣華院の開山である。禪師は又播州龍野の城主脇坂侯よりも歸依を受け、同院は侯が禪師の爲に、特に建立せられた寺で、今も尙ほ同侯の菩提寺と成つて居る。後陽成天皇は、國師に參得して即心即佛の公案に於て、大機大用を得給ひ、叡感斜ならずして、既に國師在世の砌り、國師號を降すべきであつたが、その志を得ざりし爲め、在日の旨に任じ、特に定慧圓明國師の號を賜ふとて、これは國師の一周忌の時に、御宣下に成つた所の御宸翰である。

是の如く孰れの御宸翰を拜するとして、一も恐懼に堪へざるものはない、皆な夫れ、御歡喜の餘り御下賜に相成つた御宸翰許りである、然れば此等の御宸翰を拜しても、禪の如何に人心を悦ばすかは、自ら思ひ半に過ぐるであらう、右の如き御宸翰は天皇が徒らに書かせ給うた、一片空々の閑文字ではない。

帝王と禪僧

閑文字に非ず

禪と茶事

榮西禪師の茶子將來

佛教の恩惠

我國の文化は佛教と密接の關係を有して居る、學術を初め美術工藝から、衣食住に至るまで、殆ど佛教の恩惠を蒙らないものは、先づ尠くないと云つて宜い、が、其中でも茶子を支那より傳へて、弘く我國一般に使用せしむる様にせしめた一事は、大に特筆しなければならぬ。

茶は今日我國の日用缺く可らざる必需品と成つて、賓客の應待、三度の食事に「無くてならぬもの」と成つて居るのみならず、年々の輸出品としても、主要なるもの、一つに數へられて居る。此の日常無くてならぬ茶は、抑も何人に依りて創傳されたる歟、今日茶の必須品なる事を知つて居る人はあつても、その茶の

傳教大師

明惠上人

如何にして我國に廣まつた歟、と云ふ事に就ては、之を知る人が殆ど尠くない様である、左れば是等の事實を闡明して一般人士に知らすといふ事は、強ち徒爾の業でもあるまい。

扱て茶を我國内一般に使用する様にせしめた、その抑もの魁けをした人は何人であるかと云ふに、京都建仁寺の開山榮西禪師（千光國師）である、或は叡山の傳教大師と云ふ説もあるが、傳教大師であると云ふ説は、日吉社神道祕密記の説にも依憑したものであらうが、此書は甚だ後世に出來たもので、信據することの出來ないものである、又一説には梅尾高山寺の明惠上人であると云ふ説もあるが、之も嘘説であつて、梅尾明惠傳記並遺訓中に左の記事があるが、何よりの證據である。

建仁寺の長老より茶を進せられけるを、醫師に是を問ひ給ふに、茶は遣_レ因消_二食氣_一快からしむる徳あり、然れども本朝に普からざる由申ければ、其實を

榮西禪師の茶子將來

禪と茶事

尋て、兩三本植る初られけり、誠に眠をさまし氣をはらす徳あれば、衆僧にも服せしめられき、或人語傳云建仁寺の正僧御房、大唐國より持て渡給ける茶子を被進けるを植るぞだてられける。
と、左れば之に依つても榮西禪師が傳來者の鼻祖であることが、自ら了解さるゝことであらう。

上古は茶を薬用に供す

然らば是に於て、一つの疑問が起きて来る、榮西禪師が茶子を宋國より初めて將來されたとすれば、禪師以前には我が邦土に茶樹なるものは無かつたかと云ふに、決して然らず貝原益軒翁はその養生訓に、
茶は上代はなし、中世唐土より渡りたり。
とあるけれども、之は翁のもう一つ考證の足りない故であつて、和漢茶誌に、

茶茗上古より本國に生ず、然れども當時採り用ゆることを知らず、徒に之を薪と爲すのみ。

とあるが、どうやら事實らしく思はれる、で榮西禪師以前には、本邦には既に深山幽谷又は叢林杯に自然生の茶があつたのであるが、當時の人は之を喫用する道を知らず、偶々知つても開は一部分の人に限り、一般人士は日用の飲料とはせずして、全く薬用に供したに過ぎなかつた様である、其證據には、茶經に、
熱渴、凝悶、腦疼、目澁、四肢煩、百節不舒に聊か四五啜すれば醍醐甘露と抗衡す。

とあり、又鶴林玉露には、

茶は昏を滌ひ滯を雪ぐ、學を務め政を勤むるに於て助なくんばあらず。

と云ひ、明恵上人は茶の十徳を選して、其茶湯の釜に誌して

- 一に諸天加護、二は父母孝養、三は惡魔降伏、四は睡眠自除、五に五臟調和

上古は茶を薬用に供す

六に無病息災、七に朋友和合、八に正心修身、九に煩惱消滅、十に臨終不亂とせられてある、榮西禪師の喫茶養生記——此の記は禪師が建保二年正月七十一歳の時に著はされた——にも全く薬用の意味を反復して、其一節には左の如き文句がある。

養生の仙薬

茶は養生の仙薬なり、延命の妙術なり、山谷之を生ずれば其地神靈なり、人倫之を採れば、其人長命なり、天竺唐土同じく之を貴重す、我朝日本曾て嗜愛す、古今奇特の仙薬なり。

空也上人

と、又村上天皇の天曆五年、京師に疫病流行し多くの病死者を出した時、空也上人に之を憐み、十一面觀世音菩薩の尊像を車に載せて自ら洛中を曳き廻はり、尊像に供へた點茶を病者に與へた所が、病者直に平癒したと云ふ事が、茶家醉古集、都名所圖會等に見えて居る、然れば上古は茶を日用の飲料とはせずして、薬用に供した事は殆ど疑ふ可からざる事實である。

上古の茶事

永忠僧正

然し乍ら、茶を薬用に供したとは云へ、一方上流社會の人々に限つて、マ、平素喫用したと云ふ事實はまんざら無きにも非らずである、弘仁六年の夏嵯峨天皇が近江國に行幸に相成り同國の梵釋寺に御幸きになつた時、同寺の永忠大僧正が手づから茶を煮て奉られると、天皇はいたく御悦びに成つて、かづけもの杯を賜はらせられ、聽て其年の六月畿内を始め近江丹波播磨等の國々に命じて茶を植ゑしめ、年々の貢物とせられたと云ふ事が類聚國史に見えて居る、又雍州府志にも、

凡そ本朝茶を賞するや舊き也、嵯峨天皇の時既に之を玩ぶ。

とあり、又海人藻介には、

茶者上古より我朝に在り、晚茶節會とて内裏に於て公事の儀式に行はせられ

上古の茶事

たり。

とあるから、強ち薬用のみではなかつたやうである、が、弘仁の時に植ゑた茶は國々の地味に適合しなかつたのか、但しは培養法其宜しきを得なかつたのか、年と共に名残りなく、消え失せて仕舞つて、延喜式の國々の貢物の中には記されないうやうになつた、であるから、榮西禪師の時には全く無くなつて居たものと見えて、禪師は喫茶養生記の中に「我朝日本會喫愛矣」とある、此の「會」と云ふ字は當時已に無くて、従前には有つたと云ふ意味で、「會」の一字が當時の状況を説明して居るやうである。

山城宇治の茶

榮西禪師が宋域から茶子を將來されたのは、仁安三年の秋で、初め肥前の背振山に植ゑて其地味に適するか否かを驗された所が、茶子一夜にして根芽を生じた

ので、其瑞草たることを知つて、之を山中に植付け、園を名けて岩上園と云ひ、それより産する茶を岩上茶と稱したといふ事が、筑後千光寺碑に出て居る。

又禪師は將來された所の茶子を、一部は朝廷に獻じて山城の宇治に植ゑしめ、他の一部は明惠上人に分贈せられた所が上人は非常に憚んで、直に深瀬の園に植ゑられると、頗る好結果を得られたとあるが、是に於て一寸注意をしておくことは、宇治の茶は上人が梅尾より移植せられたと云ふ事實である。初め榮西禪師は朝廷に獻納して之を宇治に植ゑしめられたとあるが、禪師の植ゑられたと云ふ茶は、其種子餘りに少量であつたか、但しは成績不良であつたか、孰れかであつたらうと思はれる、何にしても現今宇治の茶は上人が梅尾より移植せられた事は事實である、で宇治の製茶に従事する者は、上人の恩に酬ゆる爲め毎年製茶の時期には先づ之を上人の眞前に獻ずることを例とした、明德二年梅尾山知事日記の中に、五月廿八日五個庄より新茶八壺到來是れ毎年恒例の貢茶也とある、左れば宇

禪と茶事

治に於ける茶は、明恵上人の恩を負ふとは言へ、其實は禪師の恩に歸せなければならぬ。

又禪師が如何なる動機の下に、茶子を將來さるゝに至つたかと云ふと、元享釋書其他の書に據れば、禪師が入宋の時偶々暑氣に中りて瘧疾なり切を病まられた事がある、すると一老翁あつて、茶を進めしに、瘧速かに治し、禪師それより茶の効に感じ給ひ、又豫わて我國茶事の廢絶を慨かれてあつた際とて、遂に茶子を將來し、併せて其栽培法、焙造法、又加へては抹茶法の如きものを傳へられたと云ふ事が實驗製茶法に見えて居る。

是の如く茶は榮西禪師に依つて宋域より將來され、それが漸次我國内に廣まつたのであるが、然らば茶事茶式は又如何にして發揮するに至つた歟と云ふに、是れ又禪門諸祖の力に頼つて漸次完成さるゝに至つたのである。

榮來の動機

藤 茶 珠 文



村田珠光

筑前博多の聖福寺に贈つた臺子があつたところ、年を経て横嶽山に傳はり、又轉じて大徳寺に運ばれ、大徳寺にあつては何人も其の何の要具なるか知る者の無かつたのを、村田珠光が一見して大に喜び直に茶事に應用した、而して其具は風爐、釜、水指、柄杓建、火筋、建水等であつたと云ふ説もある、然れば茶式の創定者は夢窓國師であるか、將た村田珠光であるかは、今一つの確なる史實の證左を得ない限り、妄りに斷案を下すことは出来ないのであるが、孰れにもあれ、茶事茶式は百丈清規より出で、同時に禪門諸祖の力に藉つて漸次發揮せられたものである事は、蓋し否み難き事實であると信ずる。

四疊半茶室の起源

今假りにその一例を示さば、凡て茶室は四疊半と定まつて居るが、此の四疊半の起源は、そも何に基いたものであるかと云へば、之は禪家方丈の型に基いたもの

禪門諸祖の

方丈

のである、古來禪門住持の居室を方丈と謂ふ、即ち茶道は之に倣つて、茶室を創め、亭主は常に此室に安坐して茶事と共に精神修養を爲すを常とした、之が抑も茶室の起つた基なのであつて、我國に於て最も古き茶室は京都東山銀閣寺東求堂の茶寮がそれである。

是に於て納は少しく方丈の意味を解釋して置かう、一體方丈の故事は何から起つたかと云ふに、禪林象器箋等の説に據ると、唐の顯慶年中に敕使衛の長史王玄策が印度に向つた時淨名の譯語の宅を過ぎた、笏を以て基を量るに十笏あり、故に方丈の室と號すとある、即ち維摩居士の居室を方丈と云つたもので、それが後世禪門住持の居室を方丈と稱することに成つたのである、方とは天地の四方にして一は萬物の始め、丈は延長の謂ひで、即ち方丈とは四方一丈の略語である、然し此一丈四方は室内その物の丈量ではなくて、地盤を一丈四方に築き、其上に内則九尺四方の室を設け其中に三尺四方の敷瓦を九枚竝べる、爾うすると、疊一枚は

四疊半茶室の起源

禪と茶事
三尺四方の瓦二枚分であるから、敷瓦九枚分は我國の疊四疊半に相當するのであるから、乃で我國では四疊半の居室を以て方丈とした、而して四枚の疊は何に象どつたものであるかと云へば、四枚の疊は東西南北に象どり、中の半疊は中央を表し、九枚の瓦は九天に配したもので、此の式に依りて建設した者を方丈と云ひ、方丈に則どつて造つた茶室を眞の茶室と云ふのである。

歸 結

之を要するに我國の茶は、古來自然生の茶があつて、それが漸次發育し培養されて、以て現今の茶と成つたもの歟、それとも宋域より將來された歟は、確實なる研究史料のなき爲に、今確かと言明することは出来ないのであるが、併し孰れにもせよ、鎌倉時代に至つて、一時中絶し、中絶したものを榮西禪師が復興されたことは上來縷々敘述した通りである、それから又茶事茶式の初めも、禪門諸大

德の恩に歸せざるを得ぬとすれば、我國の茶業に従事し又は茶事に關係ある者は勿論、幾千萬の同胞は日々夜々茶を喫用する毎に、是等の諸禪に對して一遍の心香を捧ぐることを忘れてはならぬ。

賣茶翁錢筒詩

隨處開茶店 一鍾是一錢

生涯唯箇裏 飢飽任天然

妙心寺の算盤面

京都の七本山

京都の臨濟宗七本山の中で、昔から斯ういふ三つの言ひ草を傳へてゐる、曰く相國寺の聲明面、天龍寺の伽藍面、大徳寺の茶の湯面、妙心寺の算盤面と、聲明とは梵唄の事で、即ち法式の事である、禪宗は一體法式を八釜しく云ふ宗旨であるが、その中でも相國寺は殊に嚴重で且つ綿密であつた、例へば懺法の如きでも妙心寺の式が五時間で済むならば、相國寺は優に七時間かゝると云ふ工合に、法式が却々八釜しかつた、乃で遂に相國寺の聲明面と云ひ出したのである、天龍寺の伽藍面とは、現今でこそ伽藍の最も完備せるは妙心寺であるが、これは近古の事であつて、ズット昔は天龍寺が第一等であつた、天龍寺は傑僧夢窓國師が時の將軍足利尊氏の歸依を受けて、後醍醐天皇の追善の爲に建立した寺であるから、

聲明面

伽藍面

思ひ切つて規模の雄大なものであつたらしい、口碑に據ると、昔し天龍の總門は今の太秦村にあつたと云ふ事だから、その境内の廣濶にして伽藍の堂々たるものであつた事は、略ぼ推測される、即ち天龍は伽藍を以て勝つてゐた所から、天龍寺の伽藍面と云ひ、大徳寺の茶の湯面とは大徳は茶の湯の元祖であつたからである、然らば妙心寺の算盤面とは何ういふことかと云ふに、有體に言へば妙心は馬鹿に算盤を弾くことが上手であつた、と云ふと、何だか禪坊主でないやうであるが、決して爾うでない、茲に「郷土光華」篇中に入れる一つの自慢面の話がある。

妙心寺は年代の上から言うても、將又境遇の上から云うても、他山に比較して誠に慘めなものであつた、即ち年代は他の各本山に比して割合に新しく、境遇の上からは始終幕府から繼子扱ひにされてゐた而已ならず開山當時の妙心寺は京都の宗教界に於ても、其存在すら認められなかつた程であるが、それが開山より六

京都の七本山

妙心寺の算盤面

傳して雪江和尚に至り雪江和尚より漸次隆盛に赴いて、大正の今日では全臨濟宗の十分の六以上を占め、宛然濟門のオーソリチーと成つて仕舞つた、而して其今日に至りしには、何等かの原因が無けらねばならず、その原因も種々あるであらうが、第一は經濟に意を用ひたこと、之れが大なる素因をなして居る。

雪江和尚と寺院經濟

現今妙心寺の倉庫の中に、正法山妙心禪寺米錢納下帳なる帳簿が、凡そ二百五十冊程保存されてある、此帳は名の示す如く、一山の會計簿であつて、年代は文明頃（即ち雪江時代）より天保年代に至る凡そ三百五十年間のものが、實に一冊も欠損せずにある、先年内田銀藏氏や辻善之助の諸氏が來て種々調査されたが、辻氏の説に依ると、此帳簿は史料としても餘程價値のあるもので、例へば大阪陣の見舞の時の入費や或は又門前の陣衆への振舞の入費等が記載してあつて、是等の記事に由て、何月何日頃には誰が妙心寺の近傍に陣取つたかと分るので、直に

史料となるものがある相である、併し乍ら、夫等は此帳簿に取つて餘り大なる價値を爲すものではなくて、此帳に依り最も注意すべき事は、即ち妙心寺の財政状態を知る一點にある、此帳簿は毎年の會計年度を八朔に始め翌年の七月十六日、即ち盆の施餓鬼を以て一ケ年と定め、近年迄其例を追て來たのであるが、近頃は帝國政府の例に倣ひ、毎年四月より三月に終ることになつてゐる、先づ此會計法の如何に嚴重であるかと云ふ一端を示すならば、此會計は龍泉、東海、聖澤、靈雲の四箇本菴が年番で之を掌り、帳簿の署名は四箇寺共にする、而已ならず尚ほ此外に大心、龍安、衡梅、の三箇寺（此三ヶ寺は本山に特別の關係ある寺）連判し、又同時に前住、當住、納所、維那、侍真、侍衣の六人も之に連署し、以て出納の誤りなきことを證明したのである、が若し此會計の算用の中に他日誤りあることを發見した場合には、其時の當事者は嚴罰を受け、其誤りを發見した者は、賞を受くる慣例であつた、此の如く會計上の法規は極て嚴重で而も亦能く整頓し

雪江和尚と寺院經濟

妙心寺の算盤面

てゐたのが、即ち一派の經濟をして豊ならしめた所以である、而して此會計法規の慣例の基を作つたのは、何人であるかと云へば、矢張雪江和尚である、米錢納下帳も雪江時代より始まつて居る、蓋し雪江和尚が、從來殆んど廢滅に歸せんとしてゐた妙心寺を中興し、遂に今日盛大の基礎を作つた所以も、其大なる原因は此寺院經濟に注意された一點にある、雪江和尚の後、四人の弟子が各一庵を開き、今日の四派の基を作つたのであるが、其派を分ちて之を維持する事の出來たのも、矢張寺院經濟に厚く意を用ゐた結果である。

活禪活地の應用

更にもう一つ妙心をして隆運に赴かした原因は、開山無相大師の宗風其物である、大師以前の臨濟禪は重に台密禪の三宗を唱へ、又大師當時の臨濟禪は多く文字禪であつた、即ちその代表者とも云ふ可きは前者にありては榮西、聖一の兩師、後者にあつては夢窓、師練等の諸師がそれである、然るに無相大師は此間に

實際禪

處して、獨り毅然として文字に泥まず、時弊に流れず、斷々乎として臨濟の眞風を鼓吹せられた、之れは臨濟宗としては、大に特筆大書すべき事で、従つて禪宗史上に於ける大師の位置も亦自ら向上する譯であるが、それは暫く置いて、兎も角妙心一派は此文字禪を排して峻嚴なる祖風を鼓吹したが爲に、大師當時に於てこそ、門庭微々とし振はなかつたが後世百年の後に至つて、眞の獅子兒が、養成されて遂に隆盛を來たしたのである、此事を詳説するに就ては先づ法門上の話と、寺門經營上の話と、凡そ二様に分けて詳述しなければ、這般の消息を語ることは出來ないが、今法門上の事は暫く措いて問はず、單に寺門經營上にのみ就て考へても、此開山直傳の實際禪の功德は、大に妙心寺の後來を裨益した、今其一例を擧ぐれば五山の僧徒が文字禪を弄して悠悠吟哦に耽つてゐた間に、妙心の僧侶は草鞋を穿いて國內を行脚し、山村水郭、その何れの處であれ、苟くも荒廢せる寺があつたれば、足を留めて之を再興しないものは無かつた、論より證據、現

活禪活地の應用

今妙心末の寺院数は殆んど四千と稱するが、此四千に近き寺院数の中で、従前天台眞言若くは他派の寺院であつたものが、十中の七分を占めてゐる、即ち自餘の三分は妙心派の僧侶が創開したもので其他は皆悉く廢寺の再興である、之れは妙心の僧侶が時代の缺陷に乗じて他宗他派の寺院を占領したのではなくて、全く荒廢せる寺院を衷心より洪嘆し、殆ど獻身的に再興したのである、之れに就て茲に古人の道念が如何に篤かつたかと云ふ事を證する、一佳話がある。

●●●●●●
古人の道念

予の寺の世代に特洲和尚(貞享三年示寂、世壽八十六歳)と云ふがある、此和尚は予の寺では普通の世代であるが、法類の龍興寺(丹波八木町)に於ては廢後新造の中興となり、又同じく法類の靈雲、常德の二箇寺(此の二ヶ寺は丹波氷上郡)に於ては、前者に於ては中興となり後者に於ては開山と成つて御座る、之に就て予は此和尚の經歷を調査したことがあるが、此和尚は予の寺に於ては別に再

興する必要なき爲、直ちに弟子の蘭山和尚に譲つて、それより龍興寺に移つて同寺の大に荒廢せるを再興し、之を再興するや、間もなく又次の弟子の棟和尚に譲りて直ちに常德寺を開創し最後に靈雲寺に移つて、此寺を中興された、即ち特洲和尚は一人にて二ヶ寺を中興し、一ヶ寺を開創して、予の寺と共に四箇寺の世代となられた、而してその中興と云ふも、僅かにその基礎を固めたと云ふ位の些細の事ではなくして、到る處開山同様の事跡が遺してある、龍興寺の現今の方丈は、即ち特洲和尚の建立であるが、實に立派なものである、又靈雲の如きも、中興開山と稱しては居れ、二百八十年來全く荒廢に歸したる古蹟を再興し、實に開祖も同様の事跡が今に歴然としてある、一ヶ寺の開山と爲るすら、既に容易の業でないのに、況してや二ヶ寺を中興し一ヶ寺を開創する杯、尙容易の業でない、蓋し特洲和尚の如きは廢寺の再興を以て徹頭徹尾一生を始終せられた、古今稀れに見る護法家と言はねばならぬ、

●●●●●●
古人の道念

斯の如く妙心寺の僧侶は、他山の僧侶が朱印を食んで、悠々閑々詩文を弄して居る間に、到る處の廢寺を尋ね、以て寺門の再興を計つた、即ち開山直傳の活禪を活地に活用したのであるが、然らばその發端を開いたものは誰れであるかと云へば、是れ又雪江和尚である、先きの會計簿も雪江和尚之を始め、又此廢寺再興の計畫を立たたのも雪江和尚である、雪江和尚は法の上に於ては特芳、景川、悟溪、英朝の四神足を出だし、寺門經營の上に於ては前述の如き大功あり、實に開山に亞ぐ所の大中興である、予は常に思ふ、眞宗の立宗上人は親鸞であるが、併し同宗の大基礎を作つた人は第八世の蓮如である如く、我が雪江和尚も亦眞宗に於ける蓮如の位置に在ると、全く爾うである。

東山時代の文化

雪江和尚の時代は恰も足利將軍義政時代で、所謂東山時代の文化の最も極盛に達した時代である、丁度此時代は例の應仁亂の荒殘、最も甚しき時代であ

つた、此時代には何ういふものか、宗教界には幾多の英衲俊傑が輩出して居る、即ち天台宗には眞盛派が起り、眞言宗には高野山の印融、及び根來の玄音道瑜、日蓮宗には有名な鍋かぶりの日親が出て、眞宗には蓮如が出て、禪宗に於ては云ふまでもなく、五山に於て英衲輩出し、特に其文學に於ては偉大なる功績を残して居る、大徳の一体も亦此時代に出て一異彩を放つた、斯様に此時代の宗教界に於て、一時の隆盛を致し、特に著しき人物の輩出せる所以は、願ふに世が亂離なるにより、世を捨て、偏に宗學に努めたるより學僧の輩出せること、次ぎには亂世に乗じて宗旨の宣揚に努めん爲、活動したると此二が原因となり、斯く蘭菊の美を呈したものであらうか、果して然りとせば妙心寺雪江和尚の中興も、亦その趨勢に乗じて起つたものと言はなければならぬ、孰れにもあれ、和尚の妙心に於ける功績は偉大なるものである。

歸結